

1月8日

「想定外の愛」

マルコ 14:1-11

武安 宏樹 牧師

14章以降は受難に向かって、不信仰と信仰の2つの流れが並んでいます。1～11節の中に女の信仰の証しが挿入されているのは、偶然ではありません。出エジプトにて全能の神が、ユダヤ人に顕された救いを感謝する過越祭には、多数の巡礼者が訪れて緊張も増し、主イエスを逮捕するにはリスクが高いと、祭司長・律法学者たちは秩序維持に留意しながら、その時を狙っていました。サタンは第1段階として宗教指導者のこうした罪深い精神状態を足場に、第2段階で十二弟子の一角に楔を打ち込み、ユダがその餌食となりました。彼は堅実な会計係に見せかけて、実際は常習犯的に金を懐に入れていました。一方で女の行為は、世の常識・非常識が敬虔・不敬虔と異なることを教えます。

彼女は何か石膏(大理石)の壺を割って、主イエスの頭上に香油を注いだ。ナルド油は化粧品・薬品・香料・葬儀に用いる貴重品ながら、ドバドバ注いだ。300デナリは労働者の年収相当に値し、弟子たちは勿体ないと彼女を非難した。彼らの言い分はケチで偽善的に見えますが、律法的・経済的に筋は通ります。彼女がはるかに非常識です。しかし主イエスは油の浪費と施しの是非でなく、主イエスを慕って行われた彼女の一途な信仰について、弁護されたのです。「りっぱなこと」は「beautiful」(NIV)と訳せます。彼女の美しい信仰の感性が、苦難に向かう主イエスの心を感動させた。対して弟子たちは、心がなかった。離れていく弟子たちの穴を埋めて、信仰深い女性たちは主イエスの友でした。不釣り合いで算定不能で説明不能の、神の想定外の愛へ応答する見本でした。この「愛の浪費」に学ばされます。主イエスが愛の浪費を惜しまないからです。

モーセの幕屋建設に際して会衆の「心から進んで」「感動して」(出 35:)捧げる姿勢に学ばされます。施しは常時可能でも、女の捧げ物はタイムリーでした。彼女のには聖霊に動かされて「この時に」捧げたのが、主イエスは埋葬の準備という意味を加えました。さらに王の即位時の油注ぎも旧約から連想します。何気ない捧げ物に、死と復活という福音の中心を表す三重の恵みがあった。惜しみなく捧げるとは、何と素晴らしい拡がりをもたらされるのでしょうか。ユダは主を売り、女は自分を捧げた。どちらも対照的な刈り取りをします。私たちは日常に加えて、示された時に想定外の献身のために備えましょう。

1月15日

「ごめんなさいと言える時」

マルコ 14:12-21

武安 宏樹 牧師

① 過越の食卓で(12～16節)

過越祭と種なしパンの祝いは、出エジプトの御業を記念して行われました。食卓にならぶ各々に大事な意味があり、小羊は死の天使から門柱に塗られた血のによって守られたことを、種なしパンは罪のパン種を全く除去するため、塩水は民の涙と開かれた紅海の水を、苦菜(わさび等)は奴隷時代の苦しみを、練り物は苦役で煉瓦を練る泥を、4杯のぶどう酒は主がイスラエルの民を、「連れ出し」「救い出し」「贖い」「わたしの民、あなたがたの神となる」(出6:6-7)ことを、それぞれ想起させるものでした。新約時代の私たちはキリストこそ過越の小羊であることを感謝しつつ、旧約時代に型として厳粛な儀式があることを覚えましょう。そして主イエスと弟子の一行もこの食卓に与りま

す。

② 裏切りの瞬間(17～21節)

この食卓は過越の救いの恵みと、種なしパンによる罪からのきよめを覚え、厳粛かつ感謝の時となるはずでした。食事は親しい間柄に許されることです。そこに主イエスが、直前まで各人の足を洗うことでこの上ない愛を示された弟子たちの中に、裏切る者がいると預言された。弟子たちには青天の霹靂。「霊の激動を感じ」(ヨハ 13:21)ながら、引き裂かれる痛みを覚えて言われました。「かかとを上げる」は蹴飛ばすの意です。理想のメシヤ像を裏切られた思いか、ユダの抱いた疑念と悔い改めぬ不正に乗じて、サタンが入ってしまいました。私たちも罪を悔い改めない時に、御心と違う方に逸れていってしまいます。

③ 自由意志の重さ

ユダの裏切りをもって、主イエスが栄光をお受けになったのだから功労者、これも神の摂理であると言う向きもあるかも知れませんが、それは違います。彼の業を弁護することで、私たちが罪と向き合うことを遠ざけてはならない。ユダは思いとどまる選択もできたのに、唆された彼自身が裏切りを選んだ。古くはアダムとエバに由来する人間の罪深い性質です。私たちも贖いにより原罪は取り去られても、日ごと放置している罪があれば彼と変わりません。安易に赦しを適用する前に、自由意志を与えられた重さを受け止めましょう。主イエスは彼を過ぎ越すことができず、身代りに過越の小羊となったのです。

1月22日

「主の晩餐」

マルコ 14:22-26

武安 宏樹 牧師

主イエスが弟子たちと囲んだ「最後の晩餐」は「最初の聖餐」とも言えます。昔の出来事を想起するばかりの過越は、キリストの臨在を覚える聖餐へと、恵みが進化(深化)しました。聖餐制定の根拠となる箇所から学びましょう。

① 制定の御言葉から (22～25節)

マルコの書き方は他と較べて「パン＝御からだ」「ぶどう酒＝御血」と簡潔で、これから十字架に向かう生々しさが伝わります。パンを裂く交わりの直前にユダが退出したことで、聖餐の交わりにパン種があつてはならないことが、分かります。主イエスは私たちに天からのマナで量的に満腹させると共に、質的に罪を遠ざける聖さの恵みにも満たされます。彼らはまだ理解ができず、失意のエマオ途上にてパン裂きを回想した時、ようやく目が開かれました。血は「いのちとして贖いをする」(レビ 17:11)もの。祭儀律法では動物でしたが、これはまことの犠牲である主イエスの型でした。4杯のぶどう酒の意味から、「罪人を呼びだし」「罪から救い出し」「血の身代金で買い戻し」「新しい民となる」。流された血で義認と和解がなされ、私たちがこの血を継承する者となります。

② 聖餐の祝福の拡がり (26節)

主イエスは私たちに聖餐にあずかりつづけるよう命じました(Ⅰコリ 11:26)。初代教会の食卓の交わりの豊かさの中心に、主の臨在がありました(使 2:46)。歴史的にはカトリックの神秘的・儀式的ミサから、あずかることで罪の赦しを得るという誤りが生まれましたが、宗教改革者ルターは信仰義認の教理から、聖餐は救い的手段であつてはならず、信じて受ける賜物であるとししました。以降のプロテスタント聖餐論は、「からだ・血」と「パン・ぶどう酒」の関係性で論争はさておき、彼らは真剣に臨在にあふれた聖餐の営みを求めていました。聖餐は新興宗教のような怪しい儀式でも、形ばかりの反復でもありません。御霊によってキリストのからだと血と一つにされていく、体験的説教です。加えて「御霊＝福音宣教」だから、聖餐に未だあずかれない同胞たちの救いを願って一人でも多くこの交わりに加えられるよう、祈らなければなりません。5000人給食(6:30-44)やカナの婚礼(ヨハ 2:1-11)のしるしから、祝福の祈りを捧げられたパンとぶどう酒は、地の果てまで賛美と共に拡大すべきものです。

1月29日

「心は燃えていても」

マルコ 14:22-26

武安 宏樹 牧師

① ペテロの裏切りの予告(27～31節)

過越の食卓で弟子たちは、不安から再び誰が一番偉いか議論していました。そんな彼らの心中を察していた主イエスの言葉は、何とも優しいものでした(ルカ 22:28)。けれども「つまずき」については、後の回復を預言したとしても、絶対につまずきたくない一心の彼らにとっては、受け入れがたいものでした。彼らはガチガチに気合いが入って「頑張っ」ていたので、御言葉が入りません。弟子訓練の集大成として、彼らに「弱さ」「失敗」はタブーに等しいものでした。そんな「頑張る」弟子たちの弱さをも主イエスは受け入れ、愛しておられます。彼らはこの「つまずきを越える愛」を知るために、つまずく必要がありました。そうでないと神に愛され立たされていることを証する、弟子になれません。一途な弟子たちに温かい目で、ガリラヤでの再会を約束される愛を思います。

② 弱さを見せた主イエス(32～42節)

主イエスはゲツセマネの園で石を投げて届くほどの至近距離に(ルカ 22:41)、彼らを座らせ、赤裸々な祈りの場で一挙手一投足と肉声突き刺さりました。一つは全人類の罪を身に受け十字架につけられる恐怖と、惑わしの激しさに、いくら神の子とはいえ苦悶し、彼らに側に居て祈ってほしかったからです。もう一つは彼らに悪魔と戦うとはどういうことか、身をもって教えたのです。意地や頑張りではなく、苦悶と信頼の狭間で神に必死に祈る、ありのままを見せたかったからです。自分の力を越えた得体の知れない敵との戦いを控え、砕かれて万軍の主の手に投げ頼む、神と一つになることを学ばせるためでした。眠りこけて祈りの備えをできなかった彼らは、誘惑に負けてしまいました。主イエスは神と一つ、彼らと一つになって祈る重要性を教えられたのです。後に本書が完成した時には、ペテロはすでにローマで殉教を遂げていました。彼は主イエスのもとでつまずいた過去を回想しつつ、口述したのでしょう。I ペテロ書で語ることは彼がつまずきから教えられたことです(4:7/5:5,8)。主イエスは彼らと寄り添い、見捨てなかった。この愛が彼らを変えたのです。

2月5日

「裏切る者と逃げる者」

マルコ 14:43-52

武安 宏樹 牧師

ゲツセマネの祈りの現場に夜討ちをかけたのが、ユダ率いる軍勢でした。彼の緻密さは悪魔に利用されて、祭司長らと下準備し、群衆を巻き込んで、主イエスを取り巻く弟子たちとの「血戦」に備えて、武器まで用意させました。さらに卑劣なのが、開戦のサインに親愛の情を示す偽りの接吻を用いたこと。この語は罪深い女(ルカ 7:38)や放蕩息子の父(ルカ 15:20)の強烈な愛を示します。悪意に満ちた裏切りを前に、主イエスは思いとどまる選択権を与えたものの(ルカ 22:48)、霊の目の覆われたユダは実行。ここに同情の余地はありません。彼は使徒の一角を占めるも、最初から救いには選ばれていなかったのです。

この光景に居てもたってもいられなくなった弟子の一人が応戦しました。しかし主イエスが制止され、敵兵に与えた傷害をいやし元通りにしました。いかなる罪でも訴えられて、主の時が台無しになってはならなかったのです。悪意をもって主を売り渡した者と、善意をもって主を守るため応戦した者が、対比されていますが、形は違っても悪魔の誘惑に負けてしまった両者です。祈り備えた主イエスのみが「権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって」(ゼカ 4:6)、静かに霊的状况を読みつつ、神の御手に従順でした(ヨハ 18:11)。

暗やみの戦いの中で、「それはわたしです」(ヨハ 18:6)の一言で敵は倒された。それこそイスラエルの民が口にすることさえ恐れた、主の御名のことです。主イエスは人として苦難の過程で、神の威光を御言葉により証されました。弟子たちがつまずいたのは闇の力にだけでなく、圧倒的な光に照らされた、圧倒的な闇の対照を恐れて、主イエスを置いて逃亡へ駆り立てたのでしょう。「ある青年」(51 節)はマルコが自分も逃げた一員として、自身を書き加えたと思われます。弟子たちも彼も主を捨てた悔い改めこそ原点と強調したのです。裏切る者も逃げる者も、どちらも主の前につまずいた罪人であることは同じ。全てが敗北者であり、どんな優秀な弟子でも自分の力では従えないのです。けれども神の視点で見れば、悪意で引き渡した者と善意で挫折した者とは、さばきは全く異なります。逃げた弟子たちでも、救いには選ばれていたのです(ロマ 8:30/エペ 1:5)。私たちの思いをはるかにこえて、救いの計画は深遠です。主の前に全ての罪人がつまずいた。ここから私たちは光のもとに進むのです。

2月12日

「御子がさばかれえる」

マルコ 14:53-65

武安 宏樹 牧師

この法廷の異常さは、死刑にするために偽証や誘導尋問も辞さない点です。刑事裁判の原則に「疑わしきは罰せず(被告の益に)」「推定無罪」がありますが、例外的なスピード処刑は独裁国家や共産主義などの粛清に見られるもので、主イエスは悲しいことに、「全議会＝世全体」から粛清を受けられたのです。たしかに「神殿をこわして～」(ヨハ 2:19)と言われましたが、それは御からだの死と復活について預言したに過ぎず、どの偽証も起訴には至りませんでした。起訴に至らなければ無罪なのに、さまざま憎しみの感情で葬り去ろうとする。彼らの頑なさに驚かされますが、私たちも同じくアダムの子孫です(ロマ 3:23)。偽証をするほど主イエスの無罪と人間の罪性が露となる、不思議な裁判です。

膠着状態を打破するため、大祭司が『キリストですか。』と問うた時に、主イエスはこれまでの黙秘を破って肯定されました。主イエスの黙秘権は、自分を守るためでなく、この時に明らかにするために行使してきたのです。『わたしは、それです。』恐るべき御名が明らかにされたこの時(ダニ 7:13-14)、全議会こぞってひれ伏し悔い改める機会でしたが、大祭司は「神への冒涇だ」(マタ 26:65)と敵意をむきだしに、内心ほくそ笑み、正当性を結論づけました。その後は死刑囚に些かの人権も認めぬ、徹底的な精神的・肉体的苦痛の末に、十字架刑に至らせた。斯くまで人は残酷に神の愛を踏みじることができ。けれども主イエスは驚くことにその全てを受け止められたのです(イザ 53:)。反論できないほど罪を犯したのではなく、反論できないほどの罪を負われた。この罪をエレミヤは病と表現しました(エレ 10:19)。罪とは重篤な病なのです。

すでにキリストを受け入れた私たちは病根を断ち切られ、代わりに御霊を植えられたことを感謝すべきです。同時に聖化途上ゆえ肉も残存しています。嫉妬深さや暴力性が首をもたげます。パウロは「御霊によりて歩め」(ガラ 5:16)と言います。御霊に歩むなら、キリストに反抗する彼らの側にはつきません。さらに歩まば、彼らから唾を吐かれ、拳で殴られ、平手打ちされる者となり、十字架上の苦しみの極致にて、「完了した」(ヨハ 19:30)と言われた主イエスの、究極的な「愛・喜び・平安～」(ガラ 5:22)に飽き足りる者となります(ヘブ 12:2-4)。

2月19日

「否認」

マルコ 14:66-72

武安 宏樹 牧師

ペテロは主イエスを「尾行」して、大祭司の庭に入りました。上の部屋では、主イエスの尋問が行われている一方、ペテロは大祭司関係者のふりをして、周囲と調子を合わせながら暖を取っていました。先の勇敢さはどこへやら。自分の勢いで先走った事の重大さにおびえ、敵陣営に媚びている小心者です。過敏な精神状態の中で、何気ない女中の言葉にむきになって御名を否認した。観念して認めればよいのに、我を見失ったか嘘の上塗りの悪循環に陥った。意固地になって否定しながら、往生際の悪い罪人のように逃げ回るので。

否認の理由の一つは身の危険でしょう。けれどもそれだけではありません。「救い主の一番弟子」という彼の誇りに、傷がつくことを恐れたのでしょう。御名を否認した彼は、裏切り者ユダと同様に墮落の危機に瀕していました。しかし二度目の鶏の鳴き声が聞こえた時に、銃で撃ち抜かれるような衝撃を覚えながら、彼は御言葉を思い起こし、拷問される主と目が合ったのです。大の男が全身を震わせ嗚咽しながら、ひたすら罪を悔いて泣き続けました。自分の意地で頑張る弟子人生に、強制的にピリオドが打たれた瞬間でした。けれどもつまずいた彼を下から支えたのが、主の眼差しでした(ルカ 22:61)。

この眼差しは否認への抗議でもなければ、単なる悲しみでもありません。つまずきを預言したように、彼の弱さへの思いやりの視線でした(ルカ 22:32)。だから彼の悔いは自分の不甲斐なさだけでなく、主の愛に応えられなかった申し訳なさがあつた。だから弟子失格の烙印と戦い続けた数日間の中でも、彼の脳裏には主の愛の眼差しが焼き付けられていたのです。同じ夜中でも、つまずいたのはユダは夜半でしたが、ペテロは夜明け近い未明のことでした。彼のように熱心でも意固地で失敗ばかりの弟子にも、主の選びの愛は注がれ、同様に私たちの弱さも見通して愛してくださる、主の憐れみを教えられます。そして前のめり気味の熱い思いから、「側近」であり続けようとしたことで、結果的に否認したけれど、そのことを通して本当の自分と主の愛に出会えた。失敗しない、軋轢を起こさない、余計なことをしないスマートな人ではなく、少々ズレた小心者、職人氣質の頑固者、失敗だらけの者が、愛で溶かされて、新しい神の器へと鑄造されます。ペテロのように主の側に居る人は幸いです。

2月26日

「ピラトとバラバ」

マルコ 15:1-15

武安 宏樹 牧師

主イエスがローマ帝国の総督ポンテオ・ピラトに引き渡される場面です。サンヘドリンの宗教議会からは執拗な尋問と辱めを受けられ、彼らは自らの手を汚さずして、ローマの手で葬り去らせよう。そうすれば支持派の群衆も彼らを恨まず、あわよくばローマも支配から手を引くと画策していました。起訴内容の3つは(ルカ 23:2)、どれも当たらないか微妙な内容に過ぎませんが、ローマから見れば内輪もめに過ぎず、ピラトとしても面倒臭い裁判でした。けれども祭司長たちと、けしかけられた群衆の勢いに負け、審理を始めます。

殴られ唾吐きかけられ、やつれた主イエスが『ユダヤ人の王』(2節)とは、おまけに何の抵抗もしないとは、何とも「ケツタイ」な被告人と彼に映った。沈黙は時に無数の言葉より雄弁です。言葉が語り得ないことを語るからです。沈黙は苦痛です(詩 39)。主イエスはこの苦痛をゲツセマネで神にぶつけた。それゆえ憎しみに満ちた訴えと投げやりな質問の中でも、威厳を保ちました。しかし異邦人であるピラトには、主イエスの霊性を理解はできませんでした。結局死罪に当たる証拠は皆無で、妻からの助言の不気味さもあり(マタ 27:19)、一刻も早く恩赦の特例も行使して、裁判官の立場を逃れたかった彼でしたが、そのような躊躇や曖昧さを許さないほど、群衆は「押しかけ」(8節口語)ます。まさか人殺しバラバを釈放せよとは言わないだろうという考えが甘かった。『その血は自分たちに』(マタ 27:25)との声に負け、ついに彼は引き渡しました。

ピラトは正義より自分の立場、祭司長たちと群衆は律法より無法を選んだ。ここに小心者で、風に吹き回される判断しかできない罪人の姿があります。本来はバラバがむち打たれ、十字架上で永遠に呪われた者となるはずでした。釈放された彼の記述は他にありませんが、自分のような重罪人が罪赦されて、主イエスの如き無罪人が罪人とされる不思議を、一番感じたのは彼でしょう。主イエスは文字通り「身代り」に、バラバの刑罰を黙って受けてくれたのです。自分の罪の身代りに主イエスが死なれたと確信する人は、何と幸いでしょう。私たちこそ十字架につけた者であり、バラバのようにさばかれるべき者です。状況やに飲まれる罪人でなく、御言葉に従って苦難を耐え忍ぶ者でありたい。そして罪から釈放された者として、神の愛を受け続けることです(Ⅱコリ 5:21)。

3月4日

「十字架の上で」

マルコ 15:16-32

武安 宏樹 牧師

ユダヤ人の要求に降伏した総督ピラトは、無罪のまま十字架刑を言い渡し、主イエスはいよいよゴルゴタ(=カルバリの丘で、十字架につけられます。不気味な丘で史上最悪の拷問を通し、神の逆説的なストーリーが展開します。ローマ兵は軍隊生活の鬱憤を晴らすかのように、むち打ちで肉が破裂して、骨も露出した主イエスを、着せ替え人形のようにして唾吐き嘲弄しました。直接の敵意はなくとも、ストレスを転嫁して喜ぶ罪人の姿が表されています。クレネ人シモンは過越巡礼中に偶然十字架を負わされ、迷惑したでしょうが、後に家族で福音のため用いられたことが記されています(ロマ 16:13/使 13:1)。

十字架刑は手を釘で打たれ、足は縛られたまま、死ぬまで放置されました。これがサンヘドリンや群衆たちが執拗に願った刑でした。「ユダヤ人の王」の罪状書きは、奇しくも世界の言葉に訳されローマ総督が宣言したことになる。両隣に強盗がつけられたのは、「ひとりを先生の右に、ひとりを左に」(10:37)という弟子たちの願いがどのようなのか、皮肉な実現を見たことになる。「神殿を打ちこわして～」とは、うわべの神殿を破棄して、ご自分の肉体にて新たな神殿を建てる救い主よと、群衆までもが嘲りながらあたかも預言する。「他人は救ったが、自分は救えない。」と嘲りながら、全能の愛を証している。

以上のようなパラドックスに十字架は満ちています。十字架を下りない。それは無力・屈辱・不自由に見えて、対極の絶対的で自由な愛を証しています。そして十字架の御業の貫徹を誰より歓迎しない者がいます。それが悪魔です。嘲弄は荒野の誘惑そのもので(マタ 4:)、背後で操作したのは危機感からでした。しかし十字架上の死と復活によって、陽動作戦は打ち破られてしまいました。私たちはシモンのように選ばれて、主と共に十字架を負う者に召されました。暗さを増していく日本の中で、私たちの信仰が試される日が近づいています。かつて先達が行ったように逃げることなく、私たちが十字架を担うならば、闇から光、死からいのちが生まれます。十字架を負うことがリバイバルです。

3月11日

「探して救うために来られたイエス」

ルカ 19:1-10

入川 達夫 師

私達クリスチャンが、隣人への救霊の思いが薄れる時それはクリスチャンとして一つの危機である。私たちは失われた人を救うために来てくださった主イエスのみこころに照準を合わせて歩んで行くものでありたい。そこで、ザアカイを訪れられた主イエスの宣教の姿勢から教えられよう。

① 失われた人の典型であるザアカイ

- 1) ザアカイは神との関係が断絶し失われた状態にあった。
- 2) しかしザアカイのうちには聖さへの飢え渴きがあった。それが主イエスを何としても見たい(知りたい)という強い思いとなってその行動を起こさせた。

② 失われた人ザアカイを訪れられた主イエス

ここには罪人を救うためにご自身から行動を起こされる救い主のミッションがあらわされている。

- 1) 主イエスがザアカイの家に泊まることを通してメシヤとしての強い使命を現しておられる。
- 2) 主イエスが自ら進んで「罪人のところに行って客となられた」行動は、罪のない聖いお方が罪人のひとりに数えられることを通して罪の贖いを成し遂げられた十字架の予告である。主イエスはそのまで私達を愛してご自身のいのちさえ与えてくださった。これこそ究極の愛である。

③ 主イエスのあとに従うべき宣教の姿勢

- 1) 主イエスは滅びの中にあつた私達のところを訪れてくださった。私たちはそれによって救われた。
- 2) 私たちクリスチャンは主イエスに習って失われた人々のところに私たちの方から尋ねていこうではないか。私たちはそれによってキリストの愛を示すことになる。
- 3) まだ滅びのただ中にある周りの人々に、この唯一無比の救い主イエス・キリストの福音を積極的に届けようではないか

3月18日

「キリストの死」

マルコ 15:33-41

武安 宏樹 牧師

十字架の傍らで、嘲る者や悲しむ者などの叫びがごちゃまぜになっていた。そこへ真昼に「主の日」(13:)を思わせる暗闇が覆うという驚くべき光景に、皆が言葉を失いました。主イエスの預言通りに、終わりの時代の幕開けです。

この瞬間に主イエスは私たち罪人の身代りとして、神に見捨てられました。ここに罪の本質とは行為以前に、親から見捨てられた悲惨な子どものように、造り主から切り離された状態、神との交わりの断絶と分かります(ロマ6:23)。善行・他宗教・哲学など自力では抜け出すことのできない泥沼こそ、罪です。罪で鈍くなった罪人と違い、主イエスは鋭い霊的感受性ゆえ罪と戦います。呼びかけが親しい二人称から三人称に後退しても、なおも信頼して叫びます。

「つかみ合いの戦いを通じて、キリストは勝利と凱歌をかちとりたもうた」(カルヴァン)

十字架にまさる苦しみは存在せず、主は私たちの救いのため捨てられました。

そして「息を引き取られた」。それは命の息を吐き出し尽くすという意です。大声で『完了した』(ヨハ19:30)とは、肉体の限界を超えて霊の叫びでしょう。それは断末魔の叫びではなく、何かを達成し後世に遺した者の「雄叫び」です。聖所と至聖所を隔てる幕は(ヘブ9:)、「上から下まで」裂かれました(ミカ1:1-4)。これにより「異邦人の庭→婦人の庭→イスラエルの庭→聖所→至聖所」の段階が撤廃され、人種・性別・社会的身分を超えて天の恵みが全人類に届いたのです。そしてただちに、百人隊長や女性たちといったユダヤ社会では周辺の人々が、福音のため用いられました。世界宣教とは第1に父なる神のご計画であり、第2に主イエスの苦難と死により、第3に聖霊を受けた使徒たちの働きです。十字架の救いはどんな者にも、傷ついた心にも、小さな者にも有効なのです。

主イエスは苦難と贖いの業を全うされて、罪・世・サタンに勝利を宣言した。この方を信じることで、私たちは内なる心の罪深く暗い部分が赦されました。幕は上→下に裂かれた。私たちは恵みに応答して下→上へ引き上げられます。

「すなわち、わたしの主キリストは、十字架へとそこに至るまで、御自身もまたその魂において忍ばれてきた言い難い不安と苦痛と恐れとによって、地獄のような不安と痛みからわたしを解放してくださったのだ、と。」(ハイデルベルク信仰問答 44)

3月25日

「被災から回復へ」

ヨエル書 1:1-12

石川 正 師

1923年9月1日相模湾北部を震源とするM7.9の地震が起こった。この夜、被災地にいたMartineによって作られたのが、聖歌「とおきくにや」である。

① いなごの災難

1)自然災害は、私たちの生活と深く結びついている

・冬の寒さの影響で野菜が高騰している

・震災瓦礫の処理は、身近な問題である

※愛知県は、碧南市の石炭火力発電所の敷地内で処理を打診

2)災害の背後に見え隠れするもの

・人は神に仕え、富にも仕えることはできない(マタ6:24)

② 災害を記録して後世に伝えよ

1)標識

・港区の小学校にある標識

・東北地方の標識と記念碑

③ 災害に備える

1)想定外＝事実と向き合わないための言い訳

2)防災から減災

・災害は忘れないうちにやって来る

3)動作性能力を高める

・頭でなく体が覚える

・計画を立てよ

4月1日

「キリストの埋葬」

マルコ 15:42-47

武安 宏樹 牧師 4

問「なぜこの方は『葬られ』たのですか。」

答「それによって、この方が本当に死なれたということを証しするためです。」(ハイデルベルク信仰問答40)

苦難から死へ、今や嵐の後の静けさのように激動の時間は過ぎ去りました。死と戦う者には励ましを送れますが、死んだ者には何もしてあげられません。アリマタヤのヨセフのようなユダヤ人有力者が、弟子の中にいたことは驚きですが、表立って信仰表明できなかった彼は忸怩たる思いがあったでしょう。せめて議員の特権を生かして葬りを通して、最後の礼儀を通そうとしました。死んだ後とはいえ、葬りを申し出ることは自分にリスクを伴うことでしたが、血みどろの体を拭き、亜麻布に包んで葬ることで、彼なりの証を立てました。

主イエスは衰弱が激しく、想像以上に早く死なれたことが確認されました。死と復活について懐疑的な見方は古くからあり、仮死状態や気絶や逃亡など、あの手この手で諸説が編み出され、聖書の真実性は攻撃を受けてきました。けれども調べれば調べるほど、死と復活の事実を受け入れざるを得なくなる。鞭打ちでは血管が剥き出て大量の血液が急激に失われ、ショック状態に陥り、心臓の活動が早まり、血圧が低下、気を失い、異常に喉が渇きます(ヨハ 19:28)。だから十字架以前に重体だったのに加え、手首と足首に大釘を打ち込まれ、その状態で吊り上げられ「骨々がみなはずれ」(詩 22:14)、最後は窒息死します。医学的記述が長くなりましたが、この状態でまだ生きているのは不可能です。

彼の墓に遺体は納められ、厳重な封印と24時間態勢の警備がなされました。疑いようもない死と厳重な葬りが、「死にて葬られ」と唱えられる所以です。ヨセフは逃げ出した十二弟子に代わって、十字架の死に様を目撃しました。彼も主イエスの愛と勇気に押し出されて、臆病なそれまでの自分を葬った。他に記述はなくとも、彼が復活の前段階の重要な働きをしたのは事実です。そして息を引き取られた瞬間に神の怒りは終焉。丁重な葬りは神の憐れみのしるしだったのです。主と共に苦しんだ彼は、新たな一步を踏み出しました。死と葬りは私たちの信仰生活にも欠かせないものです。古い罪の債務証書が釘付けにされて、自我の死と葬りを通して、復活が始まるのです(ロマ 6:4-8)。

4月8日

「墓にはおられません」

マルコ 16:1-8

武安 宏樹 牧師

埋葬は安息日前で時間がなく、丁寧に香油を塗ったり、「最後のお別れ」をする時間がなかったため、明けるのを待って女性たちは墓へと急行しました。2トある石を移動する実際問題よりも、感謝の表れとして何かしたい思いは、女性ならでです。しかし巨大な石は墓から完全に撤去され、中は空でした。遺体と向き合いピリオドを打つ機会を奪われて、彼女たちはうろたえました。

代わりに「いなずまのように輝き、雪のように白い」(マタ 28:3)御使いとの邂逅が待っていた。見てはいけないものを見たかのように恐怖で我を忘れました。しかし御使いは彼女たちに恐怖を与えたり、おどかすため現れたのではなく、相変わらず墓の遺体に拘泥している彼女たちの、見当違いを正されたのです。墓が空であることは復活自体の要件でなく、復活の証拠を見せるためでした。自分の目で確認して御使いのこぼを受け入れるのは、主イエスの愛でした。小さな墓に納まることも満足もされない、復活の偉大さを知らせるためです。

「お弟子たち『と』ペテロ」(7節)は、「とりわけ」「とくに」という意味です。否認するという過ちを犯したペテロは、女性たち以上につまずいていました。十字架の死により悔い改めの機会も失い、一生心の傷を負うところでした。彼は申し訳ない思いでいっぱいでも、復活の主イエスは会いたがっていた。ペテロは幕屋に(9:5)、女性たちは墓に、主への思いから納めようとするも、その大きすぎる愛はとても納められないし、自分の知恵で計れないものです。

キリストの復活は「千の風になってあなたを見守る」漠然とした慰めでなく、墓が破壊されてもはや何の役にもたないほどに、永遠に人格的に私たちと生きてくださるのです。その慰めは私たちの人生観の根本的修正を迫るほど、強烈なものです。だから律法主義と自己義認からの悔い改めを迫られます。墓も幕屋も撤廃して、偉大な主を崇めるためです。復活の主は強い愛なる方。神に近づく力もない弱い者に、とくに個人的に関わろうとされる慰め主です。この復活の奇蹟を信じるがゆえに、私たちは強い平安を得ることができます。

4月15日

「すべてに時がある」

伝道者の書 3:1-15

武安 宏樹 牧師

本書は人生の目的とは何か、生きる意味は何かについて探求した書物です。「空」といえば、般若心経にあるような「色即是空、空即是色」を想像しますが、世界は常に移りゆくものとしてそこにあるので、それ以上のものは存在せずとの仏教的無常観は、本書の神無き人生の比喩的「空」と似て非なるものです。

「定まった時期」(3:1)とは、何事も神の定められたタイミングがあることで、人間の意志と努力でどうしようもない出来事の最たるものが、死の問題です。苦しみや死を人間が自他ともに受け入れ、慰めるのには限界がありますが、キリスト者が違うのは、絶対他者である創造主を信じることで、背後にある神が計画して私たちに教えようとされている意味を、御言葉から受けること。神のなさることは永遠ゆえに(3:11)、人間が見きわめることはできなくとも、私たちは神に思いを馳せ、信仰によって理屈や経験則を超えて何か判ります。私たちが有限な存在であることは絶望でなく、信仰によって希望となります。

そして人間の正しさについて「すべての人が罪の下にある」(ロマ3:9)ゆえに、自己義認と墮落のどちらにも陥らない中庸の感覚を積極的に体得するように勧めます。世の誰もが求めるタイミングとチャンスは信仰の感覚によります。「あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ」(12:1)とは年齢もそうですが、信仰の柔軟性が問われるように思います。神が嫌われるのは、頑なさです。伝道者は経験と知識の一切を十分に吟味した上で、人生で最も重要なことは、神を恐れることと結論づけます(12:13)。彼は「空」といっても無神論者でも懐疑論者でもなく、ただ決り切った公式では割り切れないこの世の不条理や複雑な物事一切に正直にぶつかった結果、①神を恐れ、②神の命令を守る、これが幸いな原則であると悟りました。この順番は逆転されてはなりません。神を恐れることから、奉仕や善行がなされないと、信仰の成長がありません。この原則こそ「人間にとってすべて」(13節)です。神の恵みとさばきの下で、私たちの人生は「空」ではなく、素晴らしく創造された人生を楽しめるのです。

4月22日

「大宣教命令」

マルコ 16:9-20

武安 宏樹 牧師

① 復活後の反応(9～14節)

十字架での一部始終を弟子たちに代わって見届けたのは、女性たちでした。見届ける意義はともかく、悲しみや喜びと寄り添うのは女性ならではの。マリヤは「だれかが私の主を取って行きました」(ヨハ 20:13)と泣いていました。彼女は悪霊を追い出していただいた者として、それが遺体であったとしても、共に居ることが全てでした。主イエスの愛に取りつかれたのです(雅 8:6)。そんな思いを察し、復活の主イエスは最初にマリヤに現れた。優しい方です。臨在を通して彼女は最初の復活信仰者となった。一方男性たちは相変わらず、「目はさえぎられていて」(ルカ 24:16)、不信な堂々巡りの議論に終始していた。彼らには主イエスは聖書的神学的弁証と、食事の席での臨在に満ちた祈りで、ようやく信じるに至りました。これは主の計画の中での順番だったでしょう。キリスト者全てが復活信仰を受け入れて、福音を伝える者となるためです。

② 大宣教命令(15～20節)

「それから」が重要です。復活理解＝キリスト理解が宣教命令へ続くのです。私たちが見ているのは死んだ方か、それとも復活・昇天された勝利の主か。宣教以前に私たちの信仰が活きているか。それは主とのコミットメントです。強いられてでもあやふやな確信でもなく、「語らずにはいられない」ものです。場所は「全世界」へ、対象者は「すべての造られた者」、語るべきは「福音」です。日本人だけでも三河人だけでもなく、諸外国のためにも福音を伝えること。整えられた人だけでなく問題のある人にも、若い人だけでなくお年寄りにも、全ての人のために主が死なれた以上、全ての人に伝えなければなりません。そして「救われた私」について以上に、「主が救われた」喜びを伝えることです。パウロ曰く「私はキリストとともに十字架につけられました」(ガラ 2:20)から。福音が全世界に拡がるために必要なのは、「聖霊の働き」(使 1:8)と「福音理解」(コロ 1:6)です。弟子たちは教育されて整えられるのに時間がかかりました。けれども「時至って」(伝 3:)彼らは復活信仰を確信し、聖霊により自立します。遺体にすがりついたり、議論に明け暮れるかつて彼らはもはやありません。復活信仰・聖霊の満ちし・福音理解が、喜びをもって宣教命令を果す基盤です。

4月29日

「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい」

～十字架に示された神の絶大な愛」

ローマ 12:15、1ヨハネ 4:7-11

住吉 英治 師

2011年3月11日、午後2時46分。M9.0。その日私は買い物中であつたが、地震の収束後、浜通りの保育所で働く妻の所に向かった。妻を助けなければと思ひ、直行。保育所に着くと先生たちは園児を保護し、駆けつけた父兄に引き渡していた。テレビでは大津波警報10分が発令、どこかの港の車が津波にさらわれていた。顔面蒼白。職員は子供たちを引き渡すまでは帰れない。私はこの時、死ぬなら妻と一緒にだと覚悟した。幸い津波は押し寄せなかった。結局帰ったのは夜の11時だった。後で聞くと教会のある一帯は40cmほど冠水したとの事。この後数日津波と家の倒壊等を恐れ、避難所生活をした。そのうち原発の水素爆発である。町の6割強の人々が東京方面に逃げ、私たちもいつ逃げようかと神様にお尋ねしたが、「まだまだ」との返事であつた。

そのうちイエス様が原発に向かわれるお姿が見え、こう仰つた。「私はこれから原発のところに行き収束するように祈る。そしてそこに残っている人々を慰め、励ましたい。」私はすぐにイエス様に申し上げた。「そんなことをすればイエス様被爆されますよ。」イエス様は仰つた。「被爆することなど問題ではない。原発事故が収束するように祈り、取り残された人々と共に生きたいのだ。それなのにあなたは私を見捨てて逃げようとするのか。」

この声を聞いたとき私たち夫婦は勿来の地に留まる事を決意した。この時、被爆もやむなしと受け止めた。この日以来同盟教団始め、多くのキリスト教諸団体から沢山の物資が届くようになり、地域に配布した。その後避難所に炊き出しなどを行い、続けて仮設住宅などに物資配給・炊き出しなど行つた。この支援は今も続いている。イエス様は今も生きて働かれ、原発事故の地域の人々や、悲しみの中にある人々と共に喜びを喜びとし、悲しみを悲しみとしていらっしゃるのである。

イエス様が十字架に向かわれる時に、弟子たちはみんな逃げてしまった。けれどもイエス様が十字架に向かわれ、十字架で死なれることで救いがもたらされた。今日、イエス様が被爆を問題とされず、原発事故地域に向かわれ、取り残された人々のところに向かわれたこと。ここに私たちの希望があり、慰め、励ましがある。お逃げにならなかつたこと、被爆をものともされなかつたこと、死をも覚悟されたこと。ここに現代のイエス様の十字架の姿がある。

5月6日

「安息日を喜ぼう」

ネヘミヤ 7:72b-8:12

武安 宏樹 牧師 4

本書はエズラ記と双子の関係で、原典では一つだったと言われています。バビロン捕囚からペルシャのクロス王の勅令によって帰還が許された上に、主の宮を再建せよと命令が出たのは、そこに御手があったからです(エズ 1:1)。神殿再建とは偶像礼拝と不信仰の罪によって打たれた主の民が、悔い改めと信仰の再建を図るため、エズラは宗教家、ネヘミヤは政治家として旗振り役となり、他国の執拗な妨害にも関わらずわずか 52 日で城壁の再建を見ました。ネヘミヤは与えられたヴィジョンのため、祈り・計画・実行に邁進しました。

再建プロジェクトからわき道にそれて、律法朗読でエズラが再登場します。「第7の月の1日目」(2節)は、ヨベルの年と同じラッパを一日中吹き鳴らし、「贖罪の日」に向けて神に覚えられ、民が神を覚えるよう備えます(レビ 23:)。その音色から神の所有、奴隷の身分からの解放を覚え、彼らは集まりました。老若男女問わず、強いられてではなく自発的に、御言葉に飢え渴きをもって、彼らは新しい啓示でなく、1000年前に与えられた律法を聞くために集まった。モーセを通してエジプトの圧政から海を開き解放された、御手を思い起こし、捕囚の屈辱の中、まことの安息は主のみであることを確認したかったのです。参加者全てが総立ちとなったため、エズラは壇上へ上がり朗読しました。御言葉に応答して賛美がこだまする。それは主への熱い信仰の表明でした。御言葉を深く思い巡らして、自分たちの犯してきた罪の大きさと神の慈愛に涙をもって悔い改め、理性も感情も全面降伏して理解して、応答したのです。悔い改めによるリバイバルがユダヤ人を包み、みなが罪を悲しんでいました。しかし第7月は仮庵の祭(収穫祭)へ至る、喜びの季節の幕開けとなるため、過去を悔いて悲しむだけに終わらぬよう、エズラら指導者は注意をしました。湿っぽい悔い改めだけではない。「主を喜ぶことは、あなたがたの力」なのです。悲しみから喜びへ。罪の認識から赦しの確信へ。その喜びを共有すること。ここにはキリストの復活を喜ぶ、新約時代の主日礼拝のひな型があります。義務的ではなく、創造主が私たちの祝福のため備えられたのが、安息日です。ただ悔いるでも喜ぶでもなく、悔い改めて神を喜ぶのが真実な礼拝なのです。

5月1日

「喜びの記念日」

エステル 9:20-28

武安 宏樹 牧師

エズラ記とネヘミヤ記は捕囚からの帰還民を通して働かれる神を示して、本書はペルシャに残っている民のためにも、神が働かれることを示します。エステルはペルシャ語で「星」、ヘブル語で香り高き灌木で白い花を咲かせるミルトスの意です。彼女は容貌と霊的人格を通して、ユダヤ人の危機の時代に燦然と輝く存在となりました。なお本書に神という語は一度も出ませんが、人物と社会の背後から、摂理の御手を動かされる神がおられると分かります。

「アガグ人ハメダタの子ハマン」(3:1)といえば、サウル王が聖絶を妥協して、不従順の罪に陥らせたアガグを想起させ、そのDNAがハマンに存在します。総理大臣の座でハマンは、自分にひざを屈めないモルデカイに怒りを燃やし、ユダヤ人殲滅計画を王の名で発布します。政治的ではなく霊的な戦いです。第一戒を死守しようとするれば、誘惑するサタンが激怒するのです(マタ 4:9)。モルデカイが恫喝に屈しないことで、ユダヤ人は存亡の危機に晒されました。彼は主の前に断食して祈り、それが霊的磁場となり、エステルは立ちました。

「我もし死ぬべくば死ぬべし」(4:16 文語)は彼女の命がけの信仰、金言です。真剣な祈りと養父モルデカイの忠告も受け、時至って王の前に進み出ます。賽は投げられた。果して王の好意を示す金の笏は彼女に差し伸ばされました。5章は主要人物4人が揃い、ハマンは相変らず敬意を示さぬモルデカイに、死刑台を用意しますが、予期せぬ大逆転劇からハマンが逆に処刑されます。そして全ての敵は彼の子に至るまで殲滅されます。これは正当防衛でした。モルデカイはハマンに代わり宰相となり、「プリムの日」を制定しました(9:)

本書の目的は律法に規定のない「プリムの日」の歴史的事実を明らかにし、この日を永遠に守らせるためでした。「エステル」でも「モルデカイ」でもなく、「くじ」の日なのはハマンへの皮肉以上に、摂理の神が主人公であるからです。異教社会で御名を語ることを許されない状況にあっても、神は生きておられ、歴史を導かれ、苦難と束縛の中でも「悲しみが喜びに、喪の日が祝日に」(9:22)、変えられることが教えられます。私たちは礼拝の民ゆえ迫害を受けますが、プリムの日とキリストの十字架から、常に勝利と安息が約束されています。

5月2日

「激しい愛」

雅歌 8:6-7

武安 宏樹 牧師

本書は様々な解釈がありますが、夫婦の愛の交わりとそこから適用される神と民とのきよい愛の交わりと読むことが、妥当ではないかと思われます。「歌の歌」(ヘブル語)、「Song of Songs」(英語)。それは聖書で最高の歌なのです。聖文書の流れとして、ヨブ記では神の絶対的主権を、詩篇では礼拝の心を、箴言は主を恐れる知恵を、伝道者の書は主を知らない人生の空しさを教え、そして雅歌は主の知恵が親密な関係をもたらすことを教え、絶頂を迎えます。

シュラムの女が男に語られた愛の言葉を思い起こしています(2:10-14)。パレスチナの気候は冬は強い雨を繰り返す、その後短い春がやってきます。シャロンは温暖・肥沃で、百花繚乱の美しさはカルメルなどと比較されます。女はつつましやかに谷の間の百合にたとえ、男は「さあ、立って、出ておいで」と招きます。この男を迎えようか思案するデリケートな女の心境が見えます。心ときめく出会いの瞬間です。主の呼びかけも心の機微に触れる繊細さと、そして周辺を回るのではなく、核心をピンポイントでつかむ強さがあるのです。

花嫁と花婿の披露宴の応答に見えますが、初夜の歓喜の歌です(4:16-5:1)。「庭」は公園のように誰でも楽しむ場所でなく、花婿のみ迎える彼女の庭です。他者の出入りを許さぬ特別な関係が、夫婦の交わり、神と人との交わりです。エデンの園には神中心の夫婦の営みを維持するために、全必要が満たされていました。しかし墮落によってこれらの交わりを邪魔すべく、陰険で狡猾な「狐」(2:15)が偶像礼拝や不品行を奨励して、世を荒らし回ります(哀歌 5:18)。主は罪人たちに「ほかの神を拝むな～その名はねたみ」(出 34:14)と言われます。

一時的な葛藤を経た後に、夫婦は共に味わう喜びの大きさを悟ります(5:)。試練を通して絆が深められるのが夫婦の愛であり、神を愛する心なのです。8章で愛のクライマックスを迎えます。妻は夫の封印となりたいと願います。パウロはキリストと教会の犠牲的愛のたとえに夫婦関係を用います(エペ 5:)。 「一心同体」(創 2:24)だからです。すさまじい愛こそ私たちが想う主の愛です。世人は刺激を求めつつ、全て無意識の内にこの愛を求めています(I コリ 13:)。私たちは主から愛の焼印、聖霊の証印を押された者。この愛を受けましょう。

5月27日

「五旬節」

レビ記 23:15-22

武安 宏樹 牧師

主イエスは天にお帰りになる前に、聖霊の降臨を約束されました(使 1:8)。それは激しく実現し、聖霊の働きによって初代教会が始まりました(使 2:)。この出来事はユダヤ三大祭の一である五旬節＝ペンテコステに起りました。

① 個人的な悔い改めの中で

五旬節の出来事から教えられる一つ目のことは、主の前にへりくだり、悔い改めの中でなされたことです。旧約時代のいけにえは、全焼のいけにえ・穀物のささげ物・和解のいけにえ・罪のためのいけにえ・罪過のためのいけにえと多く、いくら完全に行って動物の血を流しても、罪性はきよめられません。しかしキリストはただ一度、完全ないけにえとして献げられました(ヘブ 9:)。私たちは完全ないけにえを知りながら、旧約時代の如き繰り返しを行ったり、あるいは旧約時代の大変さを知らないばかりに、安直な悔い改めを行ってはいないでしょうか。すでに与えられたいけにえを感謝すると、聖霊が働かれ、へりくだって主を見上げる者に聖霊の力はとどまります。聖霊の働きにより、罪への抵抗 力がつき、神の愛が身に沁みて、他の人と比較しなくなります。「愛・喜び・平安・寛容・親切・善意・誠実・柔和・自制」(ガラ 5:22)の実を結びます。

② 召し集められた祭の中で

二つ目のことは、私たちは神の選びにより集められた集団ということです。仕事を休んで集められて神を礼拝し、互いに励まし合います。霊的状态は、個人から群れ全体に波及します。悔い改めしなければ全体の霊性が下がるし、へりくだって力を受けて歩めば全体が恵まれます。礼拝は聖霊の働きです。だから個人的にさえない時でも無理してでも礼拝に来れば、神の召しなので恵まれて帰ることができます。パウロは全体の成長をキリストのからだに、たとえています(エペ 4:16)。神に選ばれた私たちは、聖霊の賜物を注がれて、力ある奉仕のために召されます。それが教会の霊的な交わりです。個人的に聖霊の実、全体的には聖霊の賜物が発揮されて仕え合うことで、成長します。五旬節は初穂の祝いでもあり、初穂＝キリストです(1コリ 15:)。聖霊降臨は霊的な収穫感謝でした。初代教会は聖霊の外向きな熱情が循環していました。終わりの時代に私たちも聖霊の働きに目を開かれ、大傾注を期待しましょう。

6月 日

「旅立ちの時」

創世記 28:1-22

武安 宏樹 牧師

ヤコブといえば、お人好しの兄を騙して長子の権利を横取りした狡猾な弟、何で人を騙す者がイスラエル民族の父として尊ばれるか、理解に苦しみます。しかし神の救いの計画から見れば、単純に弟が勝者で兄が敗者とは言えない。異邦人の救いが先行しているからです。そして長子の権利を得てから以降は、伯父のもとで 20 年働き、姉と結婚させられた7年など雌伏の時を過ごします。「因果応報」に見えますが、彼は苦難を通じ碎かれきよめられ成長するのです。

父は兄を、母は弟を偏愛していたため、4人の人間模様はバラバラでした。原因として人間的趣向を神の御心より優先させたこと、父のリーダーシップ欠如により母が主導権を握ったこと。その策略によって弟が相続権を得ます。霊的に疎い兄は時すでに遅し。異教徒の妻をもらったのが祝福の妨げと考え、イシュマエルの家系(傍系)から妻をもらって、付け焼き刃的な策を講じます。何が本質的な問題なのか把握せずに、安直に自分の欠陥を取り除こうとする。成長しない信仰者の典型です。兄は祝福を手放して、霊の目が覆われました。

弟の方は旅立った最初の孤独な夜に不思議な夢を見、それが転機となった。後ろめたい逃避行の中で、神がこんな罪深い自分に現れてくださったことで、約束を成し遂げるまで決して捨てない神であることを知り、励まされます。彼はその場所をベテル＝神の家と名付け、石の枕を柱として油を注ぎました。そして感謝の応答の祈りを「主」に捧げた。一人称が頻出する幼い祈りですが、彼の今後の霊的成長は努力でも忍耐でもなく、先立つ主の臨在によりました。「天からのはしご」は、人間が地上から積み上げた「バベルの塔」と正反対です。このはしごはキリストの十字架により、すでに私たちにも伸ばされています。兄のように人に喜ばれ、神の好意を得るために宗教的努力を繰り返すのは、霊的に盲 目な人間の特徴です。はしごに足をかける時、私たちは神との契約の中で上ることができます。主が選びの恵みにより引き上げられるからです。

6月1日

「探して救うために来られたイエス」

民数記 13:17-33

武安 宏樹 牧師

本書は2度の人口調査を除けば、大部分は荒野での彷徨について扱います。民の不従順の結果としてカデシュでの足踏みは、38年の長きに亘りました。13～14章は不従順のクライマックスですが、停滞は無意味ではありません。「烏合の衆」から主の共同体へと変えられていくために、必要な期間でした。出エジプトは救いだけでなく、「乳と蜜の流れる地」に彼らを上らせるため、私たちに洗礼(入信)と聖化の關係に、当てはめることができるでしょう。神は民にかの地に入らせてくださる約束で、繰り返し動機づけされました。

御言葉の約束といえども、無為に進むのではなく偵察隊が派遣されました。命じられたことは行いましたが、彼らは「しかし～」と意気阻喪していました。目のあたりにした難攻不落と思いき町々に、サタンの悪しき思いに覆われた。さらに否定的見解をモーセ個人ではなく、全民衆の前で発表し扇動しました。カレブの鼓舞も空しく、「いなご同然」と臆病の靈に取り憑かれた彼らにより、民全体が惑わされて停滞を余儀なくされました。謙遜と卑屈は大違いです。小さな存在でも全能の神に依り頼めば、「しかし～」は肯定的表現となります。私たちの知恵は限界があると知ること。さもないとサタンに利用されます。結局偵察隊10人は主に打たれました。罪のパン種は除去されねばなりません。

民も度重なる不従順により打たれそうになりましたが、モーセのとりなしにより命は助かりました。その代償として40日が40年の停滞となりました。これは厳しいさばきですが、もし入れても彼らのわがままで罪深い靈性は、何も変わっていないために、早晚問題が噴出して原住民に追われるでしょう。あるいは彼らの中で深刻な不従順や対立が絶えなかったでしょう。だから、留まることでかえって、主の御手を受けやすい環境だったといえるでしょう。長らく足止めを食うと私たちは苛立ち、神に不平不満をぶつけるものです。けれども長い目で見れば停滞を信仰によって受け止めて、ちょうど良い時に次の一步を進ませてくださる。遅れを取っても御言葉の約束は変わりません。苦難・忍耐・謙遜を深く学ぶ中で、私たちは聖化の恵みにあずかりましょう。そして神が「凡(すべ)てのこと相働きて益」(ロマ8:28)としてくださることを学びます。

6月17日

「喜びのクリスチャン生活」

Iテサロニケ 5:16-18

渡邊 賢治 師

① 「いつも喜び」(16節)

喜びはクリスチャンの特性。喜びは神から来る。「いつも」はできないか。

悲しみの時がある。そんな時、神に目を向けよ。悲しみは喜びに変わる。

罪は喜びを消し心を暗くする。神に罪を告白すること。悲しみ憂いは喜びに変わる。

② 「絶えず祈る」(17節)

祈りはクリスチャンの特権。神に祈る。その祈りを神は聞いてくださる。

神に「何でも」求めてもよい。「絶えず」(たゆまなく)祈ることはどうか。

あきらめないで神を信じ祈り求めよ。

「求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの喜びが満ち満ちたものとなるためです。」(ヨハ 16:24)

③ 「すべての事に感謝」(18節)

感謝はクリスチャンの口癖。「神さま感謝します。」

しかし、「すべての事」(「どのような状況でも」)感謝するのは難しい。

感謝よりつぶやきの方が多くないか。神に目を向けよう。神の恵みは溢れている。

太陽や雨—神が備えて私たちを生かしてくださっていることを思うだけでも感謝と喜びに変わる。

最高の恵みは、主イエス・キリストがともにいてくださること。

「わたしはいつもあなたがたと共にいる。」(マタ 28:20)

主に目を向ける時、感謝と喜びに変わる。

6月24日

「幸いな人々」

黙示録 1:1-8
長谷部 丈衛 師

① 招きの言葉(1～3節)

a) この預言の言葉を朗読する人、何度でも読む人でありたい。

聖書は喜んで読みたいですか？ 読むのが当たり前になっていますか？

b) 熱心に聴く人、全身耳にして聞く人。

つまり喜んで聞き、知ろうと心がけている人。

c) その内容に心を留める人。聞くだけで終わらず、自分のものにするようにして、行動に移す人。実践する人。

② 「幸いである」中心はイエス・キリスト(4～8節)

a) キリストは信者の中から最初によみがえられた方(5節)

b) キリストは昇天された時と同じ有様で、雲に乗って、来られる(7節)。

主イエス様を、喜びを持って、迎えられる信徒は幸いだが、用意のない人は惨め。何故なら、その日は裁きの日になるから。

c) キリストは、アルファーでありオメガ。つまり永遠なるお方であられる。

③ 最期の時が近づいている。

最近の私の心は自分の最期が確かに近づいている。痛い箇所は次々と生じ、物忘れはひどく、ふらつき、忍耐強く出来ないことを感じ、短気になったり。しかし老いることは個人差がありますが、平等に毎年1つずつ歳は増えます。元気でコロリと行く人もあります。いかに前向きに生きているかどうか、大切なポイントでしょう。

そのときは分からないのが幸せです。そして大切な事は、学んだように、備えていることです。すべての人は、裁かれますが、預言の言葉を信じて、何時も、読んで、心に受け取って、信じたように実行する人です。実行にはイエス様を礼拝する為に、教会に通う人です。その証が礼拝出席、祈禱会にも出席することになるわけです。

「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。

古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」(Ⅱコリ 5:17)

7月1日

「メリバの水」

民数記 20:1-3

武安 宏樹 牧師

本書 20～21 章にはイスラエルの民の最後の旅、カデシュ～ピスガの頂まで記されています。過程で様々な事件が起こりますが、ミリヤムの死をもって始まります。モーセの姉として、女預言者として重要な地位にありましたが、出すぎたことで病に冒されたり(12:)、約束の地を見ずして世を去りました。彼女の死 民の不平 モーセらの不従順 アロンの死と、旅の始まりは暗い。長年の荒野の旅で民も疲れて、信仰を持っているのに、過去の恵みの数々を知っているのにも関わらず、わざと荒野で 10 度も神を試みたのです(詩 95:)

一時的な困難のため救いの恵みを忘れて、不平不満の感情に支配される。恵みの主を忘れて不従順に陥る(申 6:12)。モーセとアロンを殺そうとする。ここで死んだ方がましだと駄々をこねる。それは偵察隊の時と全く同じです。何でそうなのか。自分の目で見たこと、感じたことに振り回されるからです。手強い相手や肉体的な危機に直面すると、もう駄目だと途端におびえます。主イエスは弟子の面前で荒れ狂う湖に、「黙れ。静まれ。」と一喝した(マコ 4:40)。恐れや不満や怒りといった感情の嵐を鎮めるには、神の権威を行使すること。神の前にかたくなになるのは、自分の肉の思いや感覚に身を任せるからです。

荒れ狂う「うなじのこわい」民を前に、モーセとアロンはもっと疲れていた。神の前にひれ伏して、岩に命じて杖でたたいたことで水があふれてきました(出 17:6)。しかし「2度」がよくなかったのか、彼らは神の不興を買いました。それは彼らも落ち着いて主の言われた通りでなく、不従順に陥ったからです。群衆の感情的な嵐に飲まれて、民をさばく怒りで自分を権威者としたのです。彼らもまた御言葉の権威に立てず、リーダーシップに実質的に失敗しました。最後の旅は厳しい幕開けでしたが、前2回と違って尻上がりに祝福されます。モーセの人生とは一体何だったのでしょう。民からも身内からも攻撃を受け、自ら好んで預言者になったわけでもないのに、神の厳しい訓練を受けました。それでも得たことは主が真実であり、他の何ものをも恐れる必要がないこと。約束の地を前に、後継者ヨシュアに不動の信仰で激励を与えました(申 31:8)。

7月8日

「主を仰ぎ見ると」

民数記 21:4-9

武安 宏樹 牧師

本書でも有名な「青銅の蛇」の話で、十字架の予告としてもよく語られます。日本では「八百万の神々」と言われ、人間の都合により大神宮から分(ぶん)祀(し)されて、方々に神社が建てられ、神話の神々や自然や戦没者などが祀(まつ)られています。ギリシャ神話で医学の神で蛇使いのアスクレピオス、他に中国やインドでも、何かと蛇は生命力から信仰対象とされました。聖書の影響かは分かりません。イスラエルでも青銅の蛇の中に、人を救う力が魔力的に存在するかのように、香が焚かれたので、ヒゼキヤ王の宗教改革により撤去されました(Ⅱ列 18:4)。ペテロは祠(ほこら)を造ろうとし(マコ 9:5)、パウロは祀られそうになり(使 14:11)、中身はともかく、神は人間の中に宗教心を創造されたことがよくわかります。

十戒の最初にあるように、空しい偶像でなく、今も生きておられる創造主を礼拝すべきことは聖書の大原則ですが、偶像に間違われかねない青銅の蛇を仰ぎ見よとはいったいどういうことでしょうか。むろんその彼方に十字架を仰ぎ見るためですが、主の救いを具体的に思い起こさせる目的があるのです。民の反応で気づかされる第一は、それが罪へのさばきと即座に理解したこと。第二は蛇を「取り去る」のではなく、「旗ざおにつけよ」と言われたことです。苦い記憶は蛇が取り去られても一生忘れないでしょう。反対にあえてそれを覚え続け神の赦しを仰ぎ見るならば、弱さの故に神から離れなくなるのです。

主イエスは私たちの罪の身代わりとして、十字架上で贖いとなりました。のろわれた姿で死なれた御子を見ながら、彼方に神のあわれみを仰ぎ見ます。これが私たちの信仰の原点です。そうでないと私たちは十字架を切り取って、罪の赦しが不十分であるかのように、その前で香を焚く悪行を犯すからです。肉の弱さは残存するも、私たちはキリストの赦しと御霊の刷新に生きます。同じ「御霊」でも偶像礼拝を重ねさせるばかりの崇り神と、解放の聖霊とでは、その働きは似ても似つかないものです。もし罪の赦しの効力に疑問があれば、十字架が自分にとって何なのか確かめて、そこに赦しが適用されることを、受け入れてください。赦しの確信に立たないと偶像を拝み霊性が低下します。深く頭を垂れて、十字架の贖いに感謝しつつ、偶像は不要と宣言しましょう。

7月15日

「主が建てるのでなければ」

詩編 127:1-2

武安 宏樹 牧師

詩 127 篇はソロモンによる都上りの歌とあるので、神殿や聖都の建設かと想像できますし、3～5節には子どもが出てくるので家庭だとも言えます。いずれにしても主が共に居られなければ、喜びのある家庭も町や国の一致も、築くことができません。「むなしい」で思い起こすのは、「空」(伝道 1:2)ですが、原語は異なり、「無意味」と「無駄」のような違いですが、聖書ではどちらも、偶像を追い求める生き方と関係します。人間は業の主役であろうとしますが、本来は人が業に加わるのであり、業の主人は神です。主の御助けなしには、健康はじめ、一国の歴史に至るまで何事も空しいというのが詩人の信念です。

私たちは人生において勝利者となるために、飽くなき追求をするものです。私は思春期における人生の疑問から教会に導かれ、受験競争の空しさから、キリストに導かれました。信じられるものがあるとは、何と幸いでしょうか。一生学ぶに価する書があり、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」(ヨハ 14:6)とあるのは、何と幸いでしょうか。主の弟子は入信即献身しました。彼らは落ちこぼれていましたが、自分の罪深さに気づかされる中で変えられます(ロマ 7:19)。私たちの幸いは罪を自覚し、悔い改め、リセットできることです。

大津市での中学校いじめ自殺に心が痛みます。誰に助けも求めても相手にされずに、おそらく福音を聞いて真の救いを知る機会もなく死を選んだ彼に、そして一人の生命の尊厳でなく、組織の体面を保つことしか考えない周囲に、最後に当事者も第三者も、日本の「律法無きムラ社会」ゆえ善悪の基準よりも、厄介者が犠牲になれば鎮静化するという世の中にです。ネット上の恣意的な断罪でしかはけ口が見つからない。人間の罪性を突き詰めれば内野も外野も殺し合うことしかできず、決まって犠牲になるのは弱い立場の人たちです。誰が悪いと言いたいのではなく、この社会の中で私たちがどうあるかです。本篇の御言葉が響きます。社会生活は一般恩恵ですが、ただそれだけでは、私たちは人生の意味を見出せず「辛苦」(新改訳)と「焦慮」(共同訳)に生きます。私たちは世の人が持っていないもの、地上では神の律法と臨在に励まされて、死なば御国に入る特別な希望を持っています。神に出会うのは素晴らしいこと。艱難に遭っている方に福音を、社会に霊的変革を、切に求めて祈りましょう。

7月22日

「あわれみは尽きない」

哀歌 3:22-24

武安 宏樹 牧師

本書はバビロン捕囚により廃墟となったエルサレムを目の当たりにして、嘆きと悔い改めとあわれみを求める祈りの書です。同時期のエゼキエル書やダニエル書が預言書らしく未来志向に対し、本書は過去に集中して悲しみ、彼方に神のこぼの真実さを願い求めるものです。美しい韻律の詩文体です。

かつて主なる神がエジプトから救い出され、契約の民とされた南ユダは、長い歳月の間に神殿礼拝から商売と偶像礼拝へ転落し、輝きは地に堕ちた。なぜ愛の契約を結ばれた国がこんな目に遭うのか、神の愛を疑う向きもありますが、彼らは人間の罪深さを忘れています。結論から言えばこれも愛です。私たちの信仰は安楽椅子のように、苦しみが除かれ、家族も仕事も祝福され、少々の罪を犯しても大目に見てもらえて、死んだら天国に入れてもらえる。そう思っている人々はバビロン捕囚のような出来事に遭うと、つまずきます。

哀歌の作者は国の不従順の罪の刈り取りを、自分の痛みとして叫びます。私たちは「目が涙でつぶれ」(2:11)るような祈りをどれほど重ねたでしょうか。町の荒廃もそうですが、それ以前に主の仰ることに耳を貸さない結果です。こういう真剣な祈りが導かれる前に、免罪符的な安っぽい恵みを求めるなら、そのような祈りは呪われるべきです。それを語る者は偽預言者です(ミカ 3:5)。罪を指摘せずに放置すると、その人も国も駄目になり、烏合の衆となります。世への証しとなるどころか笑い者になります。預言者は忠実であることです。モーセもエレミヤも主イエスも使徒たちも、真実を語って圧力を受けました。

「光はやみの中に輝いている」(ヨハ 1:5) 不真実の中に

一点の真実があります。悲惨な捕囚の後の時代に、約束された救い主の訪れこそ、神の真実な愛です。絶望の淵から這い上がる気力さえ失い、ついに主の契約の恵みを知るに至る。3章では主の厳しいさばきに対する訴えと、主の恵みをたたえる賛美とが、絶望と希望が、矛盾すると思われるほど交差して本章最後は祈りで閉じます。神のあわれみを求めるとは不沈艦ではなく、今にも沈みそうな船に乗り込み、暗闇の中で光を語る者です。支離滅裂ではなく、信仰の筋が通っています。詩文書の感情的側面から、私たちも真理を求める者の戦いを適用しましょう。

7月29日

「聖なるものとなりなさい」

レビ記 11:44-45

武安 宏樹 牧師

レビ記は出エジプト記のテーマである律法と幕屋についての、続編です。11章以降はシナイ山で与えられた律法の続編で、聖い生活について教えます。11章のリストには食べて良い生き物より、いけない生き物の方がずっと多く、私たちが日常生活で接するものばかりです。これでは何をやっても汚れると思いがちですが、聖なる神がご自分の民を聖にあずからせるための訓練です。福音書でパリサイ人が律法遵守のプロだと自認するのは、ナンセンスです。全ての者が律法を守れず汚れていることで、ただ聖なる神を見上げること。ただ主の民とされていることを喜ぶことこそ、律法の与えられた目的です。

旧約のイスラエルの民も、新約のキリスト者も、救いはキリストの贖いにあります。聖と俗の狭間で祭司として自ら完全な犠牲となられたそのゆえに、信じる者の身分が「義認」される。裁判で無罪宣告を受けるようなものです。もう一つが「聖化」で、罪深い性質がキリストの聖に造りかえられる恵みです。一つ目に「聖」の語源が「分離」であるように、神の聖は罪人と次元が違うこと。二つ目に、聖なる神が私たち罪人と交わりを持とうとされていることです。神は不義を憎まれますが、罪人を愛されるゆえ手を差し伸ばします(イザ6:)。三つ目に、「聖なる者となりなさい。わたしが聖であるから。」ということです。律法で文字の上で、さらに生ける神と出会って、己の絶対的汚れを知ります。そのうえで神の聖を追い求めること。聖霊体験を通して主の臨在を知ります。信者全てに聖霊が注がれている以上、人により速さは異なれど聖化されます。

新約時代では、犬猫を触ったり、ヤモリを踏みつぶして汚れを宣告されることはないにしても、それくらい日常的な汚れとは何だろうと思わされます。私たちは多分に世の影響を受けています。安息日厳守・父母を敬う・殺すな・盗むな・姦淫するな・偽証するなといった十戒は、いとも簡単に破られます。だからこそ私たちは能動的に十戒にある神の基準から、聖なる生活を追求し、なおかつ内なる聖霊のお働きに心を開いて、聖化の恩恵に浴したいものです。

8月5日

「神をよく知るために」

エペソ 1:15-23

武安 宏樹 牧師

エペソ書はパウロの獄中書簡で、コロサイ書とは双子の書簡と言われます。本書はキリストの素晴らしさに始まり、教会の素晴らしさと勧めへと発展します。1章は神の選び(3-6) キリストの贖い(7-12) 聖霊による保証(13-23)と、三位一体を意識しながら、キリストにある教会の卓越性が語られていきます。

① 「神への信仰、人への愛」(15-16 節)

14 節までの賛美から、「こういふわけで」(15 節)とパウロの祈りに入ります。素晴らしい祝福をくださった神への賛美が、手紙の相手へ感謝に向けられます。キリストへの敵意に燃えていた者が、選ばれ、贖われ、聖霊の証印を押され、異邦人へ福音を伝える使徒の務めに任じられた。だからどんな苦しい時でも、「感謝」(I テサ 5:18)と言えた。何が感謝か、それはエペソ教会が祝福を受けて、神への愛と隣人への愛の実践に燃やされていることを、伝え聞いたからです。エペソ教会に見られる、初代教会的な「縦と横」の愛のバランスが有効です。

② 「パウロの祈り」(17-19 節)

感謝だけでなく、さらなる教会成長を祈ります。離れている彼らのために心注ぎだして祈ることは簡単ではありません。そこには主の愛と宣教命令を遂行する志がなければできないからです。聖霊に満たされながら、具体的な「知恵」「啓示」に基づいて祈ります。この2つは「父・御子・御霊」が一体となり、初めて理解しうることです。パウロの祈りは、目に見える彼らの幸いでなく、目の覆いが除かれ(II コリ 3:18)、「知恵」「啓示」に目が開かれるための願いです。原語では、「エネルギー」「ダイナマイト」など力強い言葉にあふれています。

③ 「すべての名の上に」(20-23 節)

「すべて」とは可視的・霊的の両方含めた全世界のことです。死者の復活は、一個人に留まらず、全世界という空間、人類史上の時間を越えるものです。天上の右の座は決して朽ちることない所で、キリストが座しておられます。パウロの言いたいことは、この権威が熱心なエペソ教会に注がれていること。だからなおいっそう栄光を現せるように、一人一人の名を挙げて祈るのです。

8月12日

「神の作品」

エペソ 2:1-10

武安 宏樹 牧師

前章の「神が人に何をされたか」から、2章では「人に神が何をされたか」に視点が移行します。「光」と「闇」の対照から、キリストの素晴らしさを語ります。

① 罪人である私たちから(1～3節)

3節で熱心なパリサイ派に属する罪人から生まれ変わったパウロの姿が、よくわかります。罪の語源は「的外れ」ですが、彼自身そうであると自覚した。霊的に死んだ罪人を支配するものが、見えないところから糸を引く悪魔です。心の空洞にキリストをお迎えすることでしか、私たちの満たしは得られず、どんなに部屋がきれいでも、「悪霊ようこそ」と宣言しているようなものです。だれでも人間の深い部分は飢え渴いています。偶像礼拝では的外れなのです。

② キリストの恵みによって(4～7節)

肉と心の欲するまま生きる罪人は霊的に死んでおり、御心を行えません。世の中で罪人の更正プログラムがあり、霊的に適用できる部分もありますが、重すぎて自分で対処ならないのが罪。だから神は最高の犠牲を送られました。そして陰府にまで下って昇天・高挙を成し遂げられ、全ての霊的權威に勝利。過去・現在・未来の全てに勝利を取ったキリストの恵みは、全てを超越します。罪赦された者が生きる新しい人生は、恵みに感謝し、成長し続ける人生です。

③ 良い働きをなすために(8～10節)

私たちは行いではなく、恵みによって救いのプレゼントをいただきました。どれだけ有難いと思っているでしょうか。時間と共に風化していませんか。「救われた」が本来の完了(継続)形ではなく、過去形になってはいませんか。何十年経っても、私たちは救われた時の純粋な信仰に根差すことが大事です。救いの恵みを感謝すると、健全な信仰が保たれます。「恵み」と「行い」とは、決して矛盾しません。私たちは良い行いを備えられた「神の作品」だからです。

8月19日

「教会の一致」

エペソ 2:11-22

武安 宏樹 牧師

今回の箇所は、ユダヤ人と異邦人とが融合するという、大きなテーマです。パウロは異邦人伝道の召しを受けた使徒でしたが、同胞であるユダヤ人の、選びの民としての優位性も忘れませんでした。ユダヤ人は異邦人をさげすみ、異邦人もまたプライドがありました。宮の聖域を越えることができず、双方の間に敵意がありました。エペソはじめアジア州諸教会は異邦人が多く、この反目が教会内に持ち込まれるなら、分裂しかねない危険性がありました。

ユダヤ人の聖域である幕屋には、聖所と至聖所を隔てる垂れ幕があって、聖所には祭司が入れますが、至聖所には大祭司のみ年1回しか許されません。そのとき自分と民の罪のために、血を携えて入らなければなりません。しかしキリストが息を引き取られた瞬間に、垂れ幕は真っ二つに裂けました。律法では分裂ばかりの両者のため、罪なき方が血を流し引き裂かれたのです。「敵意を廃棄する」とは、敵意が働くことのできないようにするとの意味です。私たちの罪のために死なれた方を仰ぎ見るとき、敵意の垣根は撤去されます。

バベルの塔の記事にあるように、人間が叡智を結集して企図したことは、神への挑戦であって、神は怒って全地に民を散らし、言語を混乱させました。分裂した民に神が与えたのは、信じる者に与えられる聖霊降臨の体験でした。聖霊を受けた者がいろいろな言葉で神の御業を語り、御霊により一つとなる。罪ゆえ散らされた民がキリストのからだに集められ、初めて一致するのです。だから遠く散らされた異邦人であっても、大胆に神に近づくことができます。

私たちは大きな顔をしているユダヤ人か。外様だと卑屈になった異邦人か。全ての垣根を取り除かれたキリスト者に、このような違いはあってはならず、どんな人種でも、どんな悪人でも、キリストにあって神に近づけるのです。信じる誰もがキリストのからだの一部、神の家族、聖霊の賜物を宿す者です。自分しかできないこと、他人しかできないこと、結び合って教会は強くなる。そのために私たちの隠し持つ垣根を取り払い、プライドを捨て去りましょう。捨て去るならば、隔ての壁を打ち破るキリストの豊かさに、目が開かれます。

8月26日

「幸いな道」

箴言 3:5-6

園 信吾 師

主イエスを救い主として信じ受け入れる前の私は、自分の悟りに頼って歩んでいました。その歩みは良い時もありましたが、悪い時もあり、安定を欠いた歩みでした。また、心はいつも不安定で、どんなに楽しいことがあっても、同時に満ち足りない心もあり、いつも不満や不安を抱えていました。まことの神様をおそれ敬わない人は、結局、人を恐れて、人の目を気にして歩むようになるのです。

しかし、自分の悟りに頼って歩む人生の限界と空しさを知り、自分ではなく主イエスを信じ、主に信頼して歩むことを知ってからは、心に感謝と平安が与えられ、以前の歩みよりもはるかに安定した、恐れから解放された人生が与えられていることを実感しています。

神さまは私たちがまっすぐな道を歩むことを望んでおられます。まっすぐな道とは苦しみが無いという意味ではありません。苦しみを通して、私たちはよりまっすぐな道、幸いな道へと導かれることもあるからです。苦しみにあった時に、それを神様のせいにしたり、人にせいにするのではなく、このこともまっすぐな道に導かれるために主が備えてくださった幸いな道であると、主に信頼して前に進んでいく時に、主は確かに私たちを幸いな道へと導いてくださるのです。

世の中では人の信頼を裏切り、お金を騙し取るような人もいますが、主は心を尽くして信頼する者をだましたり、悪いものを与えようとするようなお方ではありません。主に信頼し、いつも主との親しい交わりを求めて歩む人を主は豊かに祝福してくださるのです。

9月2日

「サムエルの誕生」

Iサムエル 1:1-20

武安 宏樹 牧師

サムエルは最後の士師(さばきつかさ)・最初の預言者として、神政政治から王権政治への転換期に、サウルやダビデといった王たちの背後で霊的指導者となりました。対照的に本書の始まりは、一夫多妻による歪んだ家族愛の話で幕を開けます。第一夫人ハンナは不妊で神から見離されていると感じ、敵の仕打ちに苦しみ、第二夫人ペニンナも夫の愛が乏しいことに苦しんで、ハンナを圧迫します。夫エルカナは真面目でしたが、妻の痛みを霊的に察知するのに鈍い者でした。

どんなに夫から大事にされても、ハンナの激しい苦しみはいやされません。このままでは女として妻として、生きていけないと思いつめていたでしょう。その絶望感が彼女を神の前へ駆り立て、祈りの中で苦しみを吐き出し(10 節)、誓願を立てます(11 節)。この間の短くない時間の中で、祈りが変えられます。日常生活など眼中にないほど、凄まじい集中力の中で神に直接触れられます。最初は自分の願いばかりですが、吐き出して神を追い求めてすがらうちに、神の熱い臨在に触れる確信が与えられて、折返地点から感謝へと変わります。うつむいていたのが、顔を上げて神の愛と希望を受け止めるようになります。そこには信仰によるいやしと悔い改めが存在し、そこから誓願が出たのです。

警戒していた祭司エリも、彼女の「主の前にに心を注ぎだしていた」(15 節)との説明を聞いて、励まし送り出しました。「注ぎ出す」=「空っぽになる」意。それは十字架の上で全焼のいけにえとなった、キリストの死との一体化です。確信を与えられてハンナの顔つきは内面の悩みが消えて、明るくなりました。一つは子と与えられる確信からの平安、もう一つはささげる決心からの平安。せっかく与えられたのに手元に残らないなどという心配は、彼女に無用です。むしろ与えられたのにささげないならば、不幸なのです。彼女の祈りの中で、主の臨在から体験したのは、漠然とした愛ではなく、十字架の犠牲愛でした。だからハンナは与えられた喜びで終わらず、子の献身の表明まで到達します。

このようにして屈指の霊的指導者サムエル(=「神の名」の意)が誕生します。私たちはエルカナのように真面目だけでなく、ハンナのように予定調和を打ち破る信仰が必要です。御前に進み出ると、愛の向こうに献身が見えます。

9月9日

「ハンナの賛美①」

I サムエル 1:21-2:3

武安 宏樹 牧師

ハンナの祈りの言葉には、ややもすると願掛けや取り引きしているように、見えなくありません。しかし彼女の祈りは賛美で始まる基本に則っています。主の祈りも「御名があがめられますように」と、天の父への賛美で始まります。「賛美は自己中心を排除する」とある先生は言います。彼女は己を忘れました。

ハンナの祈りが自己中心でなく健全で力強い証拠が、1～3節にあります。「主を誇り～主によって高く上がり～主のように聖なる方～」全てが賛美です。ただの感情の爆発ではなく、神の愛と御言葉に 응답してなされたものです。人には顧みられたい、愛されたい、上げられたい思いが心の深い部分にあり、プライドを自分で守ろうとすればするほど、強欲と不安に苛まれるものです。「敵」(複数形)はペニンナではなく、主にある自分に敵する不特定多数です。ハンナは自分を上げようとしません。それは主が上げてくださるからです。

「高ぶり」は忌み嫌うべき罪の根源として、聖書で事ある毎に登場します。「目」の高ぶりがもろもろの罪の端緒です(箴6:16-19)。「からだのあかりは目」と主イエスは言われます(マタ6:21-23)。聖いものを見れば行いが変わります。ハンナは傷ついた時もあったでしょうが、目を天に向けて勝利者となります。高ぶる目や横柄な口を禁じる理由は、主だけが全てをご存知であるからです。不妊で苦しんでいても、医学的手段を超えて主は奇蹟を起こしうる方です。私たちに分からない神の計画があると認めるとき、高ぶりの愚を悟ります。

高慢に端を発す罪に歯止めをかけるのは、主を知る知性と摂理の御手です(箴8:13-14)。己の高ぶりを拒絶し全知の主を見上げると、希望が残ります。私たちはどれほど全知の主を求めているでしょうか。「知ったかぶり」でも、「知らんぶり」でもなく、無限の神が有限の人間に注がれる知識を根拠として、私たちのことばや行いに生かされているでしょうか。「高価で尊い」(イザ43:4)全ての人の存在を祝福しつつ、聖書で語る罪について戒めることは必要です。それ以外のことについて、安易にさばいてはいないでしょうか。高ぶろうとする時に、高ぶりで失敗した時に、ハンナのように主の全知を覚えましょう。

9月16日

「喜びって何だろう」

ピリピ 1:1-11

富澤 誠治 師

ピリピ書1章からパウロは何を喜びとしていたのか汲み取りましょう。

① パウロには見つける感謝(喜び)がありました(3節)。

ここには感謝、喜びを見つけると言う大切な姿を確認することができます。

私たちの生活の中には、時期時期に見つける喜びがあります。それを見つめるのは喜びです。パウロはピリピ教会の中に喜びを見出していました。これは学び取らなくてはならないものですね。

② パウロには祈る喜び(とりなしの祈り)がありました(4節)。

ある教会の中に伴侶が信仰告白していない方がいました。教会の人々は、その夫婦のために祈っていました。その伴侶が洗礼を受けたいと言い出しました。決心ができたのです。教会の中の喜びはあふれんばかりです。とりなしの祈りには喜びがともなうのですね。パウロはこの喜びを知っていました。私たちもとりなしの祈りの喜びを確かにしたいです。

③ パウロには福音宣教の喜びがありました(5節)

パウロの広い心を 15～18 節に見ることができます。

「人々の中にはねたみや争いをもってキリストを宣べ伝える者もありますが、善意をもってする者もいます(15 節)。一方の人たちは愛をもってキリストを伝え、私が福音を弁証するために立てられていることを認めています(16 節) 他の人たちは純真な動機からではなく、党派心をもって、キリストを宣べ伝えており、投獄されている私をさらに苦しめるつもりなのです(17 節)。すると、どういうことになりますか。つまり、見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆるしかたで、キリストが宣べ伝えられているのであって、このことを私は喜んでいます。そうです、今からも喜ぶことでしょう(18 節)。」

パウロの喜びはこういうものだったのです。

④ パウロにはピリピの教会の人々の信仰の進歩の喜びがあったのです(25 節)。

今まで見てきたものは、パウロの生活の仕方、考え方でした。私たちも何を喜びとしているのか考えて見る必要があるようです。

9月2日

「主に感謝」

イザヤ 51:1-3

佐藤 紀子 師

1節の御言葉を中心にどのような所から救い出されて、この教会になくはならない者として置かれていることを、主に感謝したいと思います。

① 「あがない」

神様はイエス様をこの世に遣わして、御子イエスの十字架の血潮という代価を支払って私たちを罪の奴隷から買い戻し、サタンの手から神様の御手に入れてくださったのです。

② 「赦し」

どれだけイエス様のお心を痛めてきたでしょうか。赦しは罪を犯したことの無い者として扱って下さるとのお約束です。その赦しは今も続いています。

③ 「恵み」

イエス様を信じ、小さな岩・穴かもしれませんが、主より切り出され、掘り出されて、今日あることは、一方的な主の恵みです。

私たちはイエス様と出会い、救われた原点を思い起こすこと、記憶すること、記念とすることは、大切なことだと思います。

9月 日

「ハンナの賛美②」

Iサムエル 2:4-11

武安 宏樹 牧師

ハンナの賛美の続きです。1～3節には一人称「私」が多く出てきますが、4節以降は「私」は皆無で、三人称「主」が多く出てきます。何故でしょうか。主を賛美しながら、自分のことを考えるのをやめた、忘れたのでしょうか。そこには1章の祈りと同様に、賛美の中で彼女の霊的な変化がありました。それは「私」「あなた」の一对一の関係から、天に居られる主に引き上げられて、あたかも御座から地上にとりなすような、「主」の視点へと昇華したのです。個人的な奇蹟体験から主が全能とまで語るのは、おこがましく思えます。けれどもひたすら耐え忍んできた深い心の傷にまで、主の愛が届いたことで、どんな弱い者も、貧しい者も、不妊の者も、主が顧みられる確信を得ました。そして賛美の中で、全世界の恵まれない者たちへ救いをもたらされる姿を、主と共に展望したのです。単なる奇蹟の有無でなく、主と共に居られること。捨てられたような者であったハンナにも、主の愛は絶えず注がれていました。だから奇蹟やサムエル誕生以上に、主を誇るがゆえに賛美に導かれたのです。

「ご自分の王」(10節)とは、国全体を治める王が現れていないのに不思議な表現です。ハンナは世界について預言する中で、王の出現を語ったのです。その預言はサウル→ダビデ→ソロモンなどの、来るべき地上の王について、それ以上に終わりの時代にさばきを行われるメシヤについて、語りました。この預言は本書のテーマである、王の現れを指し示す伏線となっています。私たちはハンナ同様、賛美の中で個人的→世界的に視点が拡げられませんが、自分の小さな祈りが、大きな世界のため一体何になるのか、途方に暮れます。昨今の政治や原発や答の見つからない問題に直面し、無力感を覚える者です。けれどもハンナが力強いのは、世の終わりのさばきを王の内に見たからです。

主イエスは2000年前に私たち罪人と同じ姿で、救い主として来られました。そしていつか分かりませんが、王国の完成のためさばき主として来られます。私たちはその日が速やかに来るように願いつつ、賛美と祈りに生きましよう。

1 月 7 日

「忠実な祭司とは」

Iサムエル 2:12-36

武安 宏樹 牧師

聞き従うか否か。聖書を貫く霊的原則は従順です(15:22-23/申 11:26-28)。「主を知らない聖職者一家」「主を知る平信徒一家」の対照で2章は展開します。

① エリの息子たちの悪行とさばき

エリにとっては孫のように従順で可愛いサムエルに対して、息子たちは、「貪欲」「不品行」「盗み」「親を敬わない」と十戒後半のほぼ全て確信犯的に違反、その背後に明らかに主なる神へ「悪魔の子」(12節)として、挑戦がありました。祭司であり父であるエリが何を言っても、聞き従わず罪をやめようとしません。父をあざ笑い、神をなめていた。それも神の箱の安置されたシロの宮です。「知る」(12節)とは性的(1:19/創 4:1)意味もあるように、神との深い交わりを意味します。彼らは祭司でありながら主を知ることを拒み、民をつまずかせ、偶像のみならず悪魔を求めていました。だからこのような悪行を犯すのです。「こんな罪を犯したら、神に見捨てられるのではないか」私たちはよく考えます。そう思うぐらいなら神を恐れています。「7度を70倍」(マタ 18:21)また十字架で「父よ。彼らをお赦してください。」(ルカ 23:34)と主イエスは驚くべき愛を表されました。唯一赦されないのは、悔い改めの「聖霊を汚す罪」です(マタ 12:30-31)。

② エルカナ家とサムエルへの祝福

息子たちの「主への」(17節)と、サムエルの「主の前に」(18節)は同じ原語で、主の面前での対照的な姿勢が浮き彫りです。サムエルの献身の結果として、さらに5人の子宝に恵まれ、息子たちの誘惑にも惑わされず、成長します。双方とも「まだ、主を知らず」(3:7)、しかし主の臨在に背を向け罪を犯す者と、任職への準備期間として献身した者とは、文字通り180度向きが違います。やがて同じ祭司でもサムエルは栄え、息子たちは没落します(30,35-36節)。ハンナの賛美(預言)がそのまま成就します(2:7)。何が教えられるでしょう。救いに遠いと思われる者も、誠実な心で求めれば霊的物質的に祝福されます。不誠実な者には悲惨な結末が待っています。もちろん悲惨さを経験しても、悔い改める者に遅すぎることはありません。主が求められるのは、心です。主の「心と思いとに従って行おう」(35節口語)祭司、新約時代は教職者も信徒も、キリスト者は「聖なる祭司」(Iペテ 2:5)として、心の献身が求められています。

1 月 14 日

「幾人かでも救うため」

I コリント 9:19-23

浜田 献 師

自由であるが、奴隷となった。

このことばはパウロの宣教の情熱を表しています。自由と奴隷は全く反対のことばですが、伝道の中においては一致しています。

自由であるが、より多くの人(魂)を獲得するために、すべての人の奴隷となりました。とパウロは言っています。

ユダヤ人にはユダヤ人のように、律法を持たない人々に対しては律法を持たない人のようになりました。弱い人々には、弱い者になりました。

パウロは異邦人の救いのために敢えて、相手に合わせることをしました (I コリント 8:13) 。伝道を行うにはまず、自分がへりくだり、順応する姿が必要です。イエス様も人間という形をとられ、仕える姿をとられました (ピリピ 2:6-8) 。その目的は何とかしてより多くの人々が救いにあずかるようになるためです。そこに焦点を合わせる必要があります。またそれには神様のとりなしと聖霊の働きが伴います。

これらのことは福音の恵みを共に受ける者となることでもあります。

1 月 21 日

「しもべは聞いております」

I サムエル 3:1-21

武安 宏樹 牧師

ユダヤ人伝承によれば、この時サムエルは 13 歳になろうとしていました。当時では成人を迎える歳です。まだ本当の意味で主との出会いがまだだったサムエルはこの瞬間にエリからバトンを受け、預言者として自立するのです。

サムエルの召命の出来事ですが、エリの訓練の下にあったことが重要です。息子たちの教育に失敗した上司を軽く見ず、主に仕えるように忠実に仕える。これはすごいことです。人への従順は主に仕える訓練です(エペ 5:22-6:9)。エリに信頼されたサムエルはあかしの箱の前で、管理を任されていました。主は三度も呼ばれた。従順でなければ、二・三度目は起きなかったでしょう。またエリが御声だと気づかなければ、そのままやり過ごしていたでしょう。だから若きサムエルの日頃の訓練と、老祭司エリの素養とが一つになって、御声を聞き遂げるアンテナとなり、最高の預言者を生む第一歩となりました。

語られた御言葉はサムエルには、恩を仇で返すような厳しい宣告でした。しかし葛藤する彼に全て隠さず語るよう厳命したエリは、一流の祭司でした。「真実を語ってほしい」と、私たちは人間的な情に訴えて人に迫るものですが、正反対です。上にある者自ら情を断ち切って、御言葉を第一にしたからです。そしてうすうす感じていたであろう、自らへのさばきを厳粛に受け止めます。私たちは祝福は歓迎しても、戒めや罪の宣告を受け止めているでしょうか。厳しい言葉を聞かないなら偶像礼拝者、語らないなら偽預言者です(マタ 7:15)。預言者は身の危険を伴うものです。しかし聞かぬ者はさらにさばかれます。だから語らなければならない。冷たい心ではなく、涙をもって語るのです。

エリは身をもって預言者の姿を教えました。サムエルには厳しい門出です。そしてこの経験を通して、後にサウルに罪を指摘し、ダビデに油を注いだ。御声に従ったからです。私たちはあまりにも軽く御声を聞こうとしています。たしかに神は愛の方ですが、時に重大なことを主が語られる覚悟が必要です。終わりの時代にそういう声を聞きたくない人、交わりを離れる人もいます。けれども世を愛するがために、真実を語り命を捨てられた方が主イエスです。

1 月 28 日

「神の箱が奪われた」

I サムエル 4:1-22

武安 宏樹 牧師

4～6章にかけてサムエルが登場しない代わりに、神の臨在の象徴である契約の箱の意味を誤って取り扱った者たちの、悲惨な結末が語られています。

「なぜ主は？」との敗戦の弁が興味深い。兵の質・量とか戦術とかそういった客観的な分析ではなく、かといって打たれたのは罪ゆえという反省もない。漠然と「？」で終わっているのは、彼らに主への間違った幻想があるからです。だから箱がお守りと化して、信仰は形骸化し、放縦な生活を送っていました。戦場の真中に持ち込もうとした契約の箱は、アシュタロテや外国の神々(7:3)同様に箱の魔力に期待し、前線兵士の士気を鼓舞するために利用したのです。荒野をさまよう時やヨルダン渡河等過去の実績に依り頼む、短絡的発想です。私たちが「単純な信仰」の名を借りた自墮落ではなく、物事の本質を追究して、己の考えより主の御心を第一とし、祈りと御言葉に生きなければなりません。

結果は惨敗。箱を御輿に戦う相手に、危機感を覚えて奮起したペリシテが、死に物狂いで戦い勝利した。皮肉にも神の箱はイスラエルでなくペリシテを助けました。そして「想定外」の四重のさばきがイスラエルに下ります(17 節)。唯一想定内だったのは、誤解を恐れず言えば、箱に神の力が働いたことです。凶報を受け取ったエリはその場で息絶えました。一番の衝撃は神の箱でした。40 年間全て犠牲にして仕えてきた至聖所の神の箱が、取り去られてしまった。民の信仰が「御神体」なら、箱の彼方に生ける神を恐れる彼は、「御臨在」です。不器用な信仰だったのですが、彼の信仰的情熱は後世で生かされます。嫁の言葉は感受性に富み、悲惨な結末と神の臨在の関係を感じ取っています。

こうして神の箱は異邦人に流出しましたが、恵みまで流出したかという点、そうではなく、箱の取り扱いの基本さえ知らないペリシテ全土は打たれて、戻ってきます。神の箱はひと時奪われ、臨在も失われなければならなかった。敗北を喫し碎かれることで、主の民として臨在なしに何もできないことを、神への恐れが欠けていたことを、心底認めて悔い改める必要がありました。私たちは無限の神を四角い箱に閉じ込めて、偶像化してはいないでしょうか。教会の頂点にキリストを、聖書の解説者に聖霊を、覚えて恐れたいものです。

11月4日

「のしかかる神の御手」

Iサムエル 5:1-12

武安 宏樹 牧師

神の箱はペリシテ側に奪われ、ペリシテ全土を旅して回るようになります。旅するといっても、戦利品として没収された後に災厄を起こし対応に苦慮し、結果的に運ばれた主要諸都市(アシュドデ→ガテ→エクロン)で厄介払いされたのです。町ごとに祀られていた偶像は異なれど、性格は豊作・多産・快樂などほぼ同じ。「偶像礼拝＝悪魔礼拝」につながり、なぜ彼らは偶像礼拝に励むかといえ、崇りへの不安や霊的存在への恐怖が存在するからで、人間は宗教的存在です。仏壇で先祖の霊を恐れ、神棚で家内安全を祈願する日本人はまさにそうです。

漠然とした不安に苛まれて早朝に確認すると、ダゴン像は倒されていた。地震か悪戯かと期待しつつ、翌朝再度確認するとやはり倒されただけでなく、頭と両腕は切断され、胴体だけが残され、「バラバラ事件」が展開されていた。頭は脳を有する知的な部分で体全体の司令塔、両腕は敵を粉砕する力の象徴。挑戦・制裁・見せしめ・異常さを思わせるやり方に、彼らは半狂乱に陥ります。聖なる神がグロテスクな制裁をするはずがないなどと、思っはけません。「主は焼き尽くす火、ねたむ神」(申 4:24)、偶像を切り刻んでショーにします。おまけにペストと思しき腫物を伴う伝染病が、アシュドデに襲いかかります。先の地上戦で大勝利を収めたペリシテは、霊の戦い(空中戦)で完敗しました。

自分たちの神々をバラバラにされた彼らの叫びは、天にまで上りました。主なる神こそ他の全ての神々を打ち砕く、真の神だと知るに至ったからです。神の箱は自ら動かずとも、ペリシテ全体で偶像を破壊し、全土を制圧します。主のなさることは本当に面白い。敵の手により敵が減ぼされていくからです。イスラエルは箱が奪われた絶望感で叫び、ペリシテは箱に打たれて叫びます。イスラエルの視点では箱と共に栄光が去ったようで、敵地で復讐を果たした。ペリシテの視点では自分たちが依存していた偶像が減ぼされ、主を求めます。人のねたみは、家族・友人など全人間関係を破壊する忌まわしいものですが、主のねたみは、人と偶像との依存関係を破壊し、解放と自由をくださいます。この地の偶像 が滅び、拝んでいた人々がここに避難するように祈りましょう。

11月11日

「賛美と礼拝」

出エジプト 15:1-21

武安 宏樹 牧師

人類史上最大の奇蹟である紅海での出来事を歌った本章は、聖書で最古の歌と言われ、私たちの捧げるべき賛美の原型をここから学ぶことができます。賛美とは他の誰にでもなく、私たちを最高に造られ、力強く治められる主に、捧げられるものです。イスラエルは契約の民ゆえ、「あなた」と「私」の関係の中にあり、神の御性質は「全能」「全知」「永遠」「愛」「義」「聖」「美」など豊かです。この御方が私にとって「力」「ほめ歌」ゆえに、ほめたたえずにはいられない。出エジプトの奇蹟は圧倒的なので、だれもが賛美への衝動を覚えたのです。私たちはどれくらい賛美を知っているでしょうか。賛美したくて仕方がない。御言葉による悔い改めと愛の迫りを感じ、ひれ伏したことがあるでしょうか。私たちはそのような賛美の中の濃厚な臨在体験により、神に近づけられます。奇蹟を毎日見せてくれないと賛美出来ないというのは、群衆の考えですが、反対に賛美を捧げるから神が何かしてくださるというのは、傲慢な考えです。

13節にはモーセの賛美の基本が凝縮されています。①恵み、②贖い、③臨在。主は選びの恵みによって永遠の昔から私たちを愛し、そして罪深い私たちをキリストの十字架により買い戻して下さり、その愛と贖いは現在進行形で私たちのうちに聖霊の力をもって働き、御国に上げられる保証となるのです。このことを賛美の中でいつも覚えることです。ただの感情の爆発でなければ、周囲に強制されいやいや歌うものでもありません。沸き上がる賛美の本質を、詩篇作者は語り(詩 71:8/119:171)、パウロは御霊の満たしこそ心から賛美を捧げる条件だと言います(エペ 5:18-19)。常に私たちが賛美するのが御心です。神殿奉獻では22種もの楽器、120名もの祭司、4,000名もの演奏者が編成され、おびたしいけにえと共に、人知をはるかに超えた宇宙的規模の賛美が、捧げられました。壮大さもさることながら、「一致した賛美」です(Ⅱ歴 5:)。歴史的にはカトリックで会衆賛美が後退し宗教改革で教職から取り戻した。ルターは、「音楽は最も偉大な神のプレゼント」「神学の次に大切なのは音楽」と言いました。最高の被造物である私たちは、最高のプレゼントである賛美で、最高の礼拝を捧げ、賛美を通して御言葉を伝え、教えようではありませんか。



11月18日

「契約の箱が戻ってくる」

Iサムエル 6:1-21

武安 宏樹 牧師

① ペリシテの箱への対応(1～12節)

神の箱はペリシテに奪われた後、主要都市の各地で災難を起して厄介払いとなり、逆に言えば「主なる神恐るべし」と無言のうちに証して回りました。彼らなりに対応を考えた結論は箱だけでなく、金の品物も添えて返すこと。そうすれば怨(おん)霊(りょう)が宥(なだ)められると、ある意味で本気で主を恐れていました。運搬方法についても、だれもが災難が偶然でなく箱の仕業だとわかる方法で、なされる必要がありましたが、「あり得ない」ことに母牛は子牛と反対方向のベテ・シエメシュにまっしぐらに引き、箱は無事引き渡し完了となりました。来た瞬間から去る瞬間まで、神の箱はペリシテに「主はおそろべき神」との、強烈な印象を残しました。彼らに律法や神学はなくとも、恐れがありました。そして主は「彼らなりの」いけにえを受け容れられました。ここが重要です。心がこもっていても、方法論に則っていないなら有無を言わずさばかれる、冷酷な神ではないことが分かります。ここに異邦人に対する主の愛を見ます。

② ベテ・シエメシュへのさばき(13～21節)

ベテ・シエメシュではレビ人の土地もあって、すぐさま全焼のいけにえがささげられます。面白いのはこのいけにえの雌牛も、ペリシテの戦利品です。領主5人はこぞって神礼拝を見届けて帰りました。ところが受け渡して早々、箱の中をのぞいた不届き者の存在で、主は町全体を打たれ衝撃を与えました。ペリシテでは災いをもたらす存在だった箱は、イスラエルでは聖を教えます。しかしこの災いを受け止めきれなかった彼らは、箱を敬遠する道を選びます。今日の箇所では双方の取り扱いの相違に、「心」と「マニュアル」の関係を見ます。どちらのいけにえが優れていたか。マニュアル的には、全焼のいけにえです。けれども心ではペリシテに軍配が上がるのではないかと。箱の帰還を喜びつつ、「お約束」の如くいけにえがささげられ、その延長というか心の間隙についてのぞき見が発生した。ベテ・シエメシュは相対的に誠実さが欠けていました。それは帰国の初期段階で碎かれる必要があった。ひいてはそれも主の愛です。私たちは神への恐れより、形骸化した方法論に依り頼んでいないでしょうか。歴史的には主を知るユダヤ人が先で、救いは異邦人が先となりました。私たちはどのような思いで聖なる神を見上げるでしょうか(詩 51:17/ホセ 6:6)。

11月25日

「全てに働く神の偉大な力」

エペソ 1:18-19

菊池 充 師

I 変わらなければならないことに気がつく

私たちは、こうしなければならないとわかっているにもかかわらず、自我の強さのためになかなか行動に出られないものです。自分の意志ではどうにもならないことでも、神様が一人一人に働いて下さる時に不可能が可能に変わります。神様の前にすべてを明け渡し、その偉大な力に頼る時に奇跡が起きます。

II 神は全てを知っているからこそ

神様は小さな私たちを心に留めておられ、私たちのたった一粒の涙も覚えていて下さいます。そしてその涙を記録して下さり、困難の中にある私たちを助けて下さるお方です。そのように私たち一人一人を常に理解して、受け入れ、そして愛して下さるお方です。

III ゲッセマネの祈りによって

イエス様は私たちの罪のために十字架にかかって下さいました。その十字架にかかれる前にはイエス様の壮絶な祈りがありました。私たちもこのような祈りをしたことがないでしょうか？ 悲しみ、苦しみにあつた時の祈りを主は覚えて下さいます。そして私たちは神様からいただくみことばを実行した時に平安を得ることができます。

IV 神をハッキリと見そして知る

神様の意志によって働く偉大な力を私たちは生活の中で体験することができます。それは知識だけの信仰ではなく、みことばを実行するという信仰によるものです。そしてそのみことばを行うことが祝福された日々の生活につながります。

12月2日

「主にのみ使えるなら」

I サムエル 7:1-17

武安 宏樹 牧師

神の箱はペリシテから不思議な方法で、ベテ・シメシュに戻されるも、中を見た不屈き者の存在により打たれ、キルヤテ・エアリムへ回されます。そこのある家に20年も安置という聞こえはいいですが、放置されていた。これは興味深いことですが、恐らく政治的理由があったのだと思われます。打たれたイスラエルは神の箱を取り去られ、心の空洞を抱えて歩んでいた。サムエルは民が偶像ではなく、真に主に飢え渴く機会を待っていたのです。

民が戦いに負け、箱を奪われ、栄光が去り、うつろな歩みをしているのは、神礼拝の傍らみな家の中で、バアルやアシュタロテを持ち込んでいたからだ。「霊的浮気」で第一戒を破り、異教の習慣に妥協し、忌み嫌われる行いゆえだ。けれども主を傷つけた罪を認め、偶像を捨てて悔い改めるなら、解放される。そのようにサムエルは全イスラエルの飢え渴きから、悔い改めを導きました。悔い改めのないリバイバルはありません。偶像を離れる力もないことを認め、ただ主に方向転換し、赦しの交わりの中で罪から脱出します(Ⅱ歴7:14-15)。ミツパに集められた民は、具体的に罪を告白して霊的回復を導かれました。

彼らの内に神の箱がないことを幸いと思い、ペリシテは再び攻め上ります。イスラエルは恐れてサムエルの祈りに、つまり箱ではなく主に頼りました。そしてやみくもに戦う前に、戦のただ中でいけにえと共に礼拝を行います。「それで主は答えられた」(9節)さばきと臨在の象徴である雷で勝利しました。全焼のいけにえを主は受け取られ、神の箱なしでも臨在を現してくださった。箱とひもつきの信仰から彼らは卒業したのです。この勝利は永続的ではなく、サムエルの代が終わると再びペリシテは侵入を試みます。だから「ここまで」主の助けを覚えて記念碑を建てました。戦没者ではなく主を覚えるためです。ヤコブがベテルで(創28:)、ヨシュアがヨルダン川で(ヨシ4:)、石を据えしました。神の箱と比べて質素ですが、勝利の実績を通して主を見上げさせるためです。主は目に見えない方で、そのような方を信頼するのは容易ではありません。手段に過ぎないものが目的となっていると、私たちの霊の目は覆われます。目に見えるものは滅びます。被造物の彼方に常に主を見上げて仕えましょう。「ここまで主が～」そしてこれからも主の助けが必要だと告白しましょう。

12月9日

「王を求める人々」

I サムエル 8 : 1-22

武安 宏樹 牧師

前回はサムエルの霊的リーダーシップの祝福を見ましたが、今回は暗転し、王制導入を巡り民との間に亀裂が走ります。息子たちへの非難もそうですが、最も腹に据えかねたのが、長年導いてきた民から「引退勧告」されたことです。士師による神権政治では内政面でも防衛面でも頼りないから、王がほしい。これは唐突な要求ではなくギデオンの時代にも出たことでした(士 8:22-23)。士師の交替で浮き沈みするよりも、世襲の王制による国の安定を願っていた。最高の士師であるサムエルによっても制御不能に達していました(士 21:25)。そんな彼らをさておきサムエルは祈りました。彼の謙遜さに学ばされます。

予想に反して主の答は、民の要求を容れて王制にせよというものでした。自分だけでなく先達の立場はどうなるのかと、サムエルには衝撃でしたが、彼の胸中をご存知の主は、「あなたの傷＝わたしへの拒絶」とフォローします。後にダビデやソロモンが現れるように、全く新しい王像が御心にありました。それまで彼らを断罪していたサムエルは、主の大きな心と幻に驚かされます。祈りの中で自分の神学よりも、「主が何をされるか」が大事だと彼は悟ります。結局彼らはサムエルを通じ、主が王制のデメリットを懇切丁寧に説明しても、「いや、どうしても～」と言い張ります。霊的確信ではなく、自分の願いです。

「私たちの王を」との思いはどこから来るのでしょうか。今の日本と被ります。国が元気な時には出ない話が、弱くなつて未来が見えないと守りに入ります。それは疲れているからです。霊肉共に疲れているから、強い者を求めます。自分を守って、自分の代わりに戦い、自分の利益を代弁してくれる者をです。サムエルの時代も、80年前の世界も、今の日本も同じように危険な状態です。では元気な時代は祝福に満ちて、疲れた時代はないのかというと、ノーです。敢えて民のわがままを容れてまで、主が王制への変更を認めたのが好例です。「羊飼いのない羊のように弱り果てて倒れている」民を、主は放置されません。だからといって天皇主権を是とはせず、そういう風潮に否と言わなければなりません。が、私たちは動かされない希望として、真の王を待望しています。パウロは再臨の約束をもって、互いに慰め合うよう勧めます(I テサ 4:16-18)。私たちも「いや、どうしても～」王の王が必要と宣言しようではありませんか。

12月16日

「初めての王の選び」

I サムエル 9:1-27

武安 宏樹 牧師

士師よりも強い王がほしい、とのイスラエルの民の願いを神は聞き入れ、ベニヤミン人キシユの息子サウルが選ばれます。結論から遡って見るなら、なぜ彼のような不従順でエエカッコシイで駄目な王が選ばれたのか、謎です。私たちはどう受け止めればよいのでしょうか。探究心をそそられる箇所です。

サウルの出自については、詳細な系図の記載と祖先が裕福であることから、良い家柄で教育も分別もあり、加えて背の高い「美男子」だったとあります。「美しい」は「良い」とも訳せますが、外面だけでなく人間的魅力もありました。良好な親子関係・主従関係を見ると、配慮に富んだ誠実な常識人に思えます。彼が父所有のろばを捜すうちに、しもべの強い勧めで神の人に会うことに。ここから奇跡的な導きの連続で、全く面識のないサウルとサムエルが出会う。サウルの選びが偶然ではなく、御言葉と御霊の導きに頼ってなされたことを、認めざるを得ません。宴では彼に祭司の待遇をし、両者は個人的関係に入り、サムエルは人目につかぬ屋上での会談、未明の出発と慎重に事を運びました。

要約するならば、息を呑むような「イケメン」が、民の待ち望んだ王として、二人の神がかった出会いの中で、人間的にも誠実を尽して、選びの確かさを共有していく。だれも文句のつけようのない人選だし、夢物語のようです。「民はみな、喜び叫んで、『王さま。ばんざい。』と言った。」(10:24)なんと、華々しいデビューでしょう。神の選びは後にペリシテを打ち破ったことでも、正しさを証明されます。たしかに「人はみかけによらぬもの」かも知れません。神の選びは時に常識を越えたり、反対に添うように、自由になされるもので、選ばれてどのような働きをするかは、神の御手と人の自由意志にかかります。主イエスは弟子団に(ヨハ 15:16)、パウロは教会に(I コリ 1:27-29)分裂を憂えて、選びへの人間的な思いこそ敵と語ります。サウルと主イエスに共通するのは、形は天地の差はあれど、最後は民のヒーロー像を裏切ったことにあります。不安定な時代の中で民の期待は病んでいました。サウル亡き後にダビデが、主イエス復活 & 昇天後に弟子たちの別人のような働きが、現れていきます。神の選びとは何と奇しいことか。摂理の中でサウルも役割を果たすのです。

12月2日

「この時代に來られる王」

ゼカリヤ 9:1-10

武安 宏樹 牧師

本書は捕囚後の神殿再建中に、妨害を受けて意気阻喪したイスラエルへ、ハガイ書と共に慰めと励ましが語られた、12ある旧約小預言書の一つです。神殿は完成しても期待したような変化は見られず、民は後向きになります。そのような無関心で暗い時代に、真の王の訪れをゼカリヤは預言しました。9章では異邦の民が「自分のために」(3節)富を追求し、他国民の血を流し、そのために偶像を拝ませる政治システムに対して、主が破壊を宣告されます。

神は後向きな民に向かって、大いに「喜べ」、「踊れ」(共)と言われました。疲れた者、下を向いた者、敵におびえた者に躍りあがって喜べと命じられる。それは目に見える姿で、「あなたの王があなたのところに來られる」からです。力強い王でありながら、謙遜なしもべは誰か。真っ先に思うのはダビデです。彼は王でありつつ信仰によって神に仕え、王としもべの二重性を保ちました。逆に言えば王が政治のみならず、自分の心の中心にまで王座を占めるならば、墮落した罪の性質がサタンの手握られて、戦争をやりたい放題と化します。一般恩恵(他宗教・道徳・平和への諸努力等)で世の荒廃は止められていますが、偏狭な主義主張に陶醉することで、自分の「とりで」で視野が狭くなります。天国へ行く道は一つですが(ヨハ 14:6)、いたずらに他を破壊してはなりません。ダビデは力と人格が高次でバランスの取れた王でしたが、彼さえ神殿建築を止められたことは(Ⅰ歴 22:8)、人間が王であることの限界を現しています。

「この方＝真の王」は「わたし＝神」の手の中で、誰も成し遂げられなかった、完全な世界征服と平和をもたらします。「この方」こそイエス・キリストです。誰の血を流すこともなく、自分の血を流して、罪と世とサタンに勝利された。今は天から世を治められ、ダビデさえ征服できなかった、信者の心の内まで、聖霊の内住によって治められます。こんな素晴らしい王が來られるのだから、喜び踊れと命じます。旧約時代に語られたのなら、新約時代はなおさらです。時至って御子が遣わされたということは、神が世を見捨てていない証拠です。私たちはこの救いに立っています。そして再臨まで走り続けます(ヘブ 12:2)。終わりの時代に戦争も地震も織り込み済みです(マコ 13:)。救いをまず喜ぶこと。そして真の平和実現のために絶えず祈り、戦い、福音を伝えていきましょう。

12月 日

「この時代に福音を」

ローマ 16:25-27

武安 宏樹 牧師

今年の標語『福音を知り、福音に生き、福音を証する』を復習しましょう。ローマ書の主題は「福音の内に現れた神の義」ですが、パウロは最後に頌栄で締めくくります。その頌栄を修飾して、福音の要約がまとめられています。

「私の福音」とは他の箇所にも登場しますが、オヤツと思わせる表現です。意味としては、「イエス・キリストの宣教」「歴史的奥義の啓示」と同義ですが、類義語のトライアングルの中で、敢えて「私の」とつけた真意がわかります。かつて彼はパリサイ派に属し、キリスト者を片っ端から迫害する者でしたが、ダマスコ途上の邂逅により、死すべき彼は赦され新たに異邦人の使徒として、キリストの苦しみを身をもって味わいつつ、福音に仕えることになりました。彼にとって「福音」と「苦しみ」は表裏です。苦しむほどに臨在が迫るからです。

だからパウロが「私の福音」と言っても、自分の功績を誇るなど論外です。キリストに従う中で、神の旧新約時代を貫く壮大な救いの計画を経験した。それも「私」のような罪人が異邦人伝道に召された感動から、頌栄を捧げた。彼にとって福音とは自分の身に起こり、自分を通してキリストが証されて、秘められた計画が明らかにされていく実存的なもの、そして深遠なものです。彼はキリストに救われ、さらに求め続ける、福音の求道者です(ピリ 3:10-12)。この福音を信じることで、「あなたがたを堅く立たせることができる」のです。

ここから主イエスの宣教命令に戻るときに、福音とは伝える対象以前に、キリストとの出会いに基づいて、聖霊主導の生き方なのだと思います。「宣べ伝えなかつたら～わざわざ」(I コリ 9:16)とは「福音」「私」が一体になって、出てくる言葉です。私たちも福音的な生き方で、自然と証しは拡がります。闇の時代に、真実な福音の光に覆いをかけずに灯すならば、それが証しです。私たちの歩みを主が見ています。それだけでなく世の中も注目しています。戦後 60 数年の平和を通し、日本のキリスト教界でも新しい魂が救われ成長し、教会が整えられ、神学の研鑽も積まれました。これからが福音の実践です。

福音に堅く立ち、雄々しく信仰を告白し、リバイバルを待ち望みましょう。